

一 位置と環境

1. 地理的環境

(1) 位置と地形 (第1図)

阿蘇の成り立ちと自然 阿蘇地方は、熊本県北東部から大分県西部・宮崎県北西部にかけての、阿蘇山を中心とする地域を指す。阿蘇山は九州本島のほぼ中央に位置しており、中央火口丘群・カルデラ・外輪山から構成される。

阿蘇山は約 27 万年前・14 万年前・12 万年前・9 万年前の計 4 回、大規模な火山活動を起こした。それぞれ阿蘇 - 1・2・3・4 と呼ばれるが、特に阿蘇 - 4 は激しく、その火山灰は北海道にまで及んでいる。これらの活動は地下にあった大量のマグマを地上に放出し、カルデラと外輪山を形成した。



第 1 図 阿蘇地域の地形と平原古墳群の位置

一 位置と環境

また、その後のカルデラ内における火山活動により中央火口丘が形成された。

中央火口丘はいくつかの山から構成されており、そのうち根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳は阿蘇五岳と呼ばれている。最も高いのは高岳で、標高は1592.3 mである。また、中岳は現在も火山活動を続けており、その火口には多くの観光客が訪れる。

阿蘇カルデラは東西18 km、南北25 kmの楕円形を呈しており、国内では北海道の屈斜路カルデラに次いで2番目の規模を誇る。カルデラ内は人々の居住区域となっており、このことが阿蘇カルデラの大きな特徴といえる。カルデラは中央火口丘によって南北に分断され、北側は阿蘇谷、南側は南郷谷と呼ばれる。標高はともに400～500 mほどである。両者の違いはカルデラ縁の様子にみることができ、阿蘇谷側のカルデラ縁は標高が600～800 mで、平坦な地形が広がっている。対して南郷谷側のカルデラ縁は標高が900～1200 mと高く、起伏の激しい地形となっている。これはカルデラ北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側の斜面が切り立っていることに起因する。

それぞれの谷には、黒川と白川が東から西に向かって流れている。これらはカルデラ西端で合流して白川となる。白川はそのまま西に向かい、カルデラ壁の切れ目である立野火口瀬から熊本平野へ流れ出て、有明海に注いでいる。その他にも、外輪山北西部には有明海に注ぐ菊池川が、外輪山東部には別府湾に注ぐ大野川が流れている。このように、阿蘇山は九州を流れる主要な河川の源流域となっており、北部・中部九州における分水界を形成している。

地質調査やボーリング調査から、カルデラ内では少なくとも3回、カルデラ湖が形成されたと考えられている。これらは、古阿蘇湖・久木野湖・阿蘇谷湖と呼ばれる。古阿蘇湖は、カルデラ形成直後に生じ、立野火口瀬から水が流れ出たことで消滅した。存在していた期間ははっきりしない。久木野湖と阿蘇谷湖は、一度開いた立野火口瀬が中央火口丘から流れ出た溶岩でせき止められたことにより生じた。久木野湖は南郷谷、阿蘇谷湖は阿蘇谷で形成された。久木野湖は約4万年前に消滅したと推定されるが、阿蘇谷湖は縄文時代早期あたりまで存在していたと思われる。

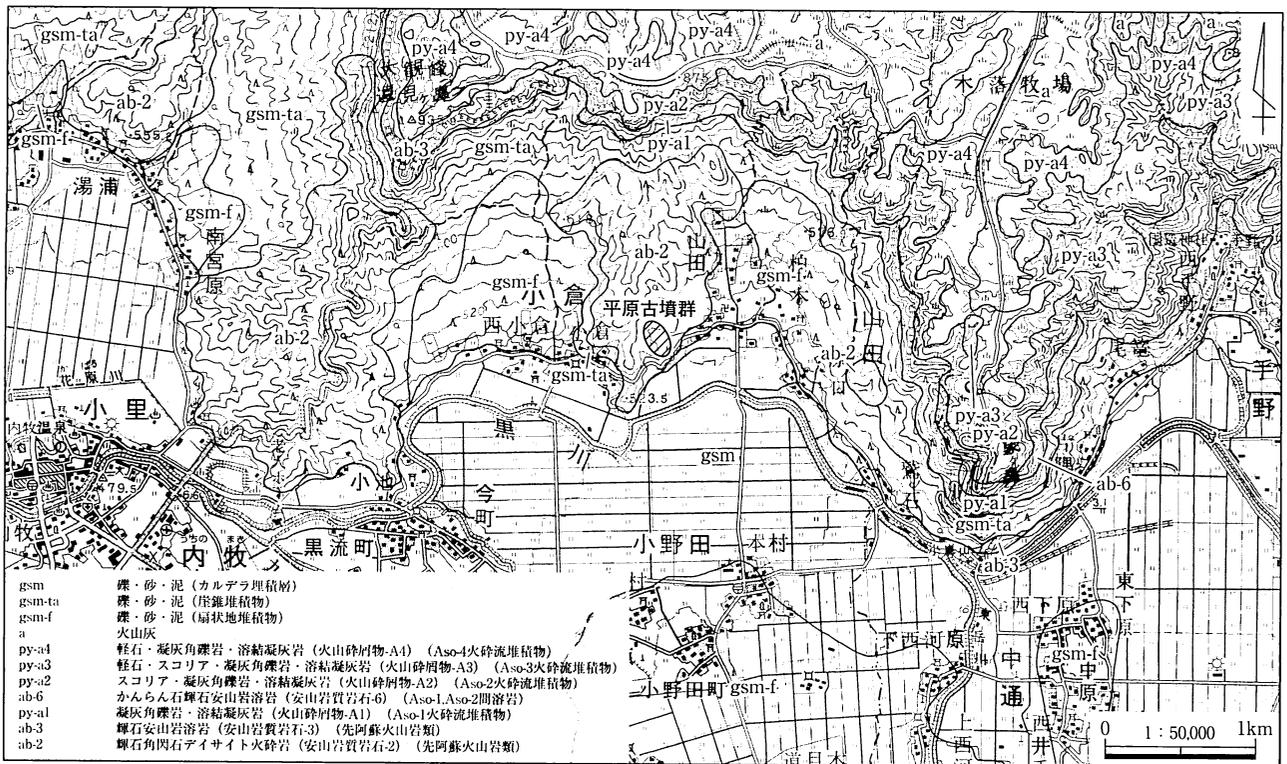
阿蘇地方は山地型気候区に属する。四季を通じて気候の変化が激しく、1月と8月の平均気温の差は20℃以上ある。夏は涼しいが冬の寒さは厳しく、ときおり激しい降雪に見舞われる。また、梅雨期の降水量が非常に多く、このことは阿蘇に豊富な水資源がある要因となっている。

阿蘇山周辺には、火山活動の影響により多くの温泉が存在している。これらの温泉は地元の人々に多く利用されており、特に阿蘇谷西部の内牧地域は温泉街として栄えている。また、外輪山に広がる高原地帯は放牧に利用されている。(森)

平原古墳群 さて、今回調査対象とした平原古墳群はこうした阿蘇地方に所在する古墳群の1つである。それは阿蘇谷北部にあり、遠見ヶ鼻(大観峰)と象ヶ鼻を直線で結んだほぼ中央、外輪山山麓の丘陵先端に位置する。西側の小倉地区と東側の山田地区に跨っており、その標高は500～530 mである。丘陵の南側には黒川が流れている。古墳群が立地する丘陵は植林された針葉樹(杉)に覆われており、大きな土地改変はなされていない。古墳群の南側には県道213号線(内牧坂梨線)が通っており、跨っている両地区の集落へと通じる。平原古墳群の南東、阿蘇谷の平地部には中通古墳群が存在し、樹木がなければお互いに視認することができると思われる。(片山)

(2) 地質

鮮新世(約520万年前～160万年前)の初期から更新世(約160万年前～1万年前)後半にかけて、阿蘇地方では数多くの火山が活動していた。これらはカルデラ形成の原因となった「阿蘇外輪火山」であり、阿蘇山誕生後に形成された「阿蘇外輪山」とは異なるものとされる。現在の鞍岳、尾ノ岳、



第2図 平原古墳群周辺表層地質図

遠見ヶ鼻（大観峰）、清栄山、高千穂野、冠ヶ岳、俵山などは火山活動後に残された阿蘇外輪火山の一部である（渡辺 2001）。

現在の阿蘇カルデラは、阿蘇外輪火山の4回に渡る火山活動（約27万年前・14万年前・12万年前・9万年前）により火砕流が発生し、陥没したことで生じた。4回の火砕流を総称して「阿蘇火砕流」と呼ぶ。その火砕流の規模は九州に存在する大きなカルデラのなかでも最大級であり、噴出物は北部・中部九州全域を数mから数十mもの厚さで覆い尽くした。

カルデラ内の平地と外輪山とを区切るおよそ300～900mの急崖をカルデラ壁と呼ぶ。阿蘇外輪山の上部にある岩石は阿蘇外輪火山の噴出物であるが、それより下層は阿蘇外輪火山より古い火山体、あるいはその噴出物である。これを裏付けるようにカルデラ壁には阿蘇山誕生以前の岩石が露出している。両者はマグマの性質も異なっており、阿蘇外輪火山より古い火山体の噴出物は「先阿蘇火山岩類」として阿蘇山の岩石と区別される。なお、先阿蘇火山とは約27万年前の大規模な噴火（阿蘇-1）以前のものを指す。

阿蘇カルデラにはいくつかの円弧がみられ、平原古墳群のある阿蘇市山田地区はその外輪円弧のひとつに位置する。表層は大観峰付近のカルデラ壁に露出する輝石角閃石デイサイト火砕岩（安山岩質岩石）であり、先阿蘇火山岩類である（第2図）。露出が限られており、その産状ははっきりしない。

カルデラおよび中央火口丘群周辺の土壌の多くは噴火に伴う火山噴出物からなり、最上部には火山灰が堆積している所が多い。この厚い堆積物のほとんどは「黒ボク土層」である。阿蘇地方の地層は最上層が黒ボク土層であり、その下はアカホヤ層、ローム層、そして始良丹沢火山灰層という順になっている。阿蘇中央火口丘群の岩石は多種多様であるが、大部分は輝石安山岩である。

なお、阿蘇火砕流堆積物のひとつである溶結凝灰岩は古くから人々に活用された。例として眼鏡橋、鳥居、石塔、そして石風呂などがあげられる。古墳時代には阿蘇溶結凝灰岩で作られた石棺が瀬戸内から近畿地方にまで運ばれたこともよく知られている。（中村）

2. 歴史的環境

(1) 弥生時代以前

旧石器時代 現在のカルデラが形成された9万年前の噴火以降、中央火口丘群を形成する火山活動が始まったが大規模な火砕流噴火は発生しなかった。外輪山上部では、少なくとも3万2千年前にはササ属を中心とした草原環境が広がり、徐々に周辺の生態系は回復したとみられる。カルデラ内では場所と時期は異なるが少なくとも3度にわたるカルデラ湖の形成が確認されている。このような自然環境から、人々の活動の場はカルデラ内の標高が低い土地ではなく、外輪山上部やその周辺に求められた。阿蘇地域の旧石器時代の遺跡はこのような場所で発見されている。また、カルデラ周辺には湧水と石器石材の露頭が点在する。このことから、旧石器時代の阿蘇地域には石材を求める人々のキャンプ地があったと推測される。なかでも、阿蘇谷北側のカルデラ壁に位置する阿蘇市象ヶ鼻遺跡群の近くには、石器石材として利用されたガラス質溶結凝灰岩の原石露頭が確認されている。

縄文時代 カルデラ直下には大分-熊本構造線があり、活断層がカルデラ最西部の立野地域に集中していることがわかっている。長年にわたる断層活動と河川による浸食作用によって、現在の立野火口瀬の辺りに切れ目が生じてカルデラ湖の水位が低下した。少なくとも7300年前のアカホヤ火山灰の降下前にはカルデラ湖は消滅していたと考えられる。しかし、カルデラ内には依然として湿地が広がり人々の生活の場としては不向きであったため、カルデラ内への進出は困難であったと推測される。縄文時代の遺跡はカルデラ内の標高470～480 m、外輪山斜面の標高520～740 mに点在している。複数時期の土器が出土する遺跡と、一時期の土器のみが出土するか土器はなく石鏃のみが出土する遺跡とに分けられる。前者の遺跡では長期間生活が営まれていたと考えられる。一方、後者の遺跡は狩猟や採集の際の一時的なキャンプ地だと考えられている。

阿蘇地域では縄文時代草創期から晩期までの土器が見つかっており、全時期を通して人々の生活が営まれたことが判明している。阿蘇地域固有の土器は発見されていないが、西からは白川を遡った曾畑式土器が、東からは大野川をつたった瀬戸内地方の船元式土器と強い関係を持つ土器群などがもたらされている。このように、阿蘇地域は九州の東西をつなぐ結節点であった。

弥生時代 縄文時代のカルデラ湖消滅以来、カルデラ内は湿地から徐々に人間が住みやすい環境に変化した。このことにより、人間のカルデラ内への進出が容易になったと推測される。弥生時代の遺跡は標高400～500 mの外輪山麓、黒川の自然堤防上や火口丘の微高地に分布している。前期の様子はあまりわかっていないが、中期以降、特に後期に入ると遺跡が爆発的に増え、規模も大きくなる。南郷谷に比べ阿蘇谷の方がはるかに多く遺跡が確認されており、なかでもその西側に集中している。このような差を生む原因として考えられているのが、ベンガラが存在である。ベンガラとは赤色顔料のことで、褐鉄鉱(リモナイト)の粉末を焼くことで生成される。阿蘇谷の西側にはベンガラの原料となる沈殿褐鉄鉱床が広がっていることが明らかになっているが、南郷谷ではその存在は確認されていない。褐鉄鉱は現在も採掘されており、その場所は阿蘇市明神山遺跡として知られている。明神山遺跡の周辺には、箱式石棺の中から大量のベンガラが見つかった阿蘇市下山西遺跡など多くの弥生時代遺跡が存在している。下山西遺跡出土の石棺中からは小型仿製鏡、銅鏃、鉄剣、ガラス勾玉が出土した。ガラス勾玉の原料は鉛バリウムガラスであることがわかっている。この素材は中国由来のものであり、北部九州ではこの素材を用いたガラス製品製作の痕跡が確認されている。なお、阿蘇市小野原遺跡群でも同じ原料のガラス勾玉が出土している。周辺には、阿蘇市鏡山下遺跡や同市下の原A遺跡などの青銅器出土遺跡があることから、北部九州との交易の存在がうかがえる。北部九州と内陸

の山間部に位置する阿蘇地域との交易を支えていたもののひとつが、阿蘇地域に産するベンガラであり、大きな役割を果たしていたと推測される。

下山西遺跡出土の箱式石棺の例が示すように、ベンガラは葬送儀礼の際、石棺に塗布され使用される。箱式石棺は下山西遺跡や阿蘇市宮山遺跡の調査によって、弥生時代後期には既に阿蘇地域に存在していたことが明らかになっている。古墳時代に入ってから、箱式石棺は方形周溝墓や小規模な円墳の主体部として使用される。阿蘇谷では阿蘇市番出1号墳、同市大石平古墳など、南郷谷では高森町中大村方形周溝墓などが具体例としてあげられる。

ベンガラと同様に阿蘇谷西側で大量に出土するのが鉄製品である。鉄製品出土遺跡としてあげられるのが、阿蘇市狩尾遺跡群や前述の下山西遺跡、小野原遺跡群などである。鉄製品が1500点以上出土している小野原遺跡群と318点出土した狩尾遺跡群ではそのほとんどが包含層や遺構埋土中からの出土である。その上、再加工品は確認されていない。このことは、鉄製品は再利用せずに廃棄することのできるありふれたものであったということを示している。このような浪費ともとれる消費の仕方から、地金は大陸からの舶来品ではなく、在地で製鉄されたものだとする考えがあるが確証は得られていない。狩尾遺跡群と小野原遺跡群では、複数の鍛冶遺構も見つかっている。一方、南郷谷では鉄製品、鍛冶遺構ともに極端に少なく、鍛冶遺構の存在が想定されるのは南阿蘇村南鶴遺跡と同村柏木谷遺跡のみである。鉄製品は南鶴遺跡で一定量が出土した以外は数点程度に留まっている。

このように、ベンガラを産し、主要な鉄製品出土遺跡が立地しているのは阿蘇谷西側である。このため、弥生時代の阿蘇地域において、拠点集落は阿蘇谷西側に存在したと考えられる。しかし、古墳時代に入ると様相が一変する。阿蘇谷東側には前方後円墳である阿蘇市長目塚古墳や同市上鞍掛塚A古墳を含む大規模な古墳が多く造られている。対して、西側では前方後円墳は造られず、少数の小規模な古墳しか存在しない。このことから、古墳時代になると阿蘇谷の中心は東側に移り、集落立地も弥生時代とは異なっていると推測される。しかし、阿蘇谷東側における集落遺跡の調査事例が少なく、様相を詳細に把握できない。阿蘇谷における弥生時代から古墳時代への勢力の移り変わりは依然として不明な点が多い。 (富高)

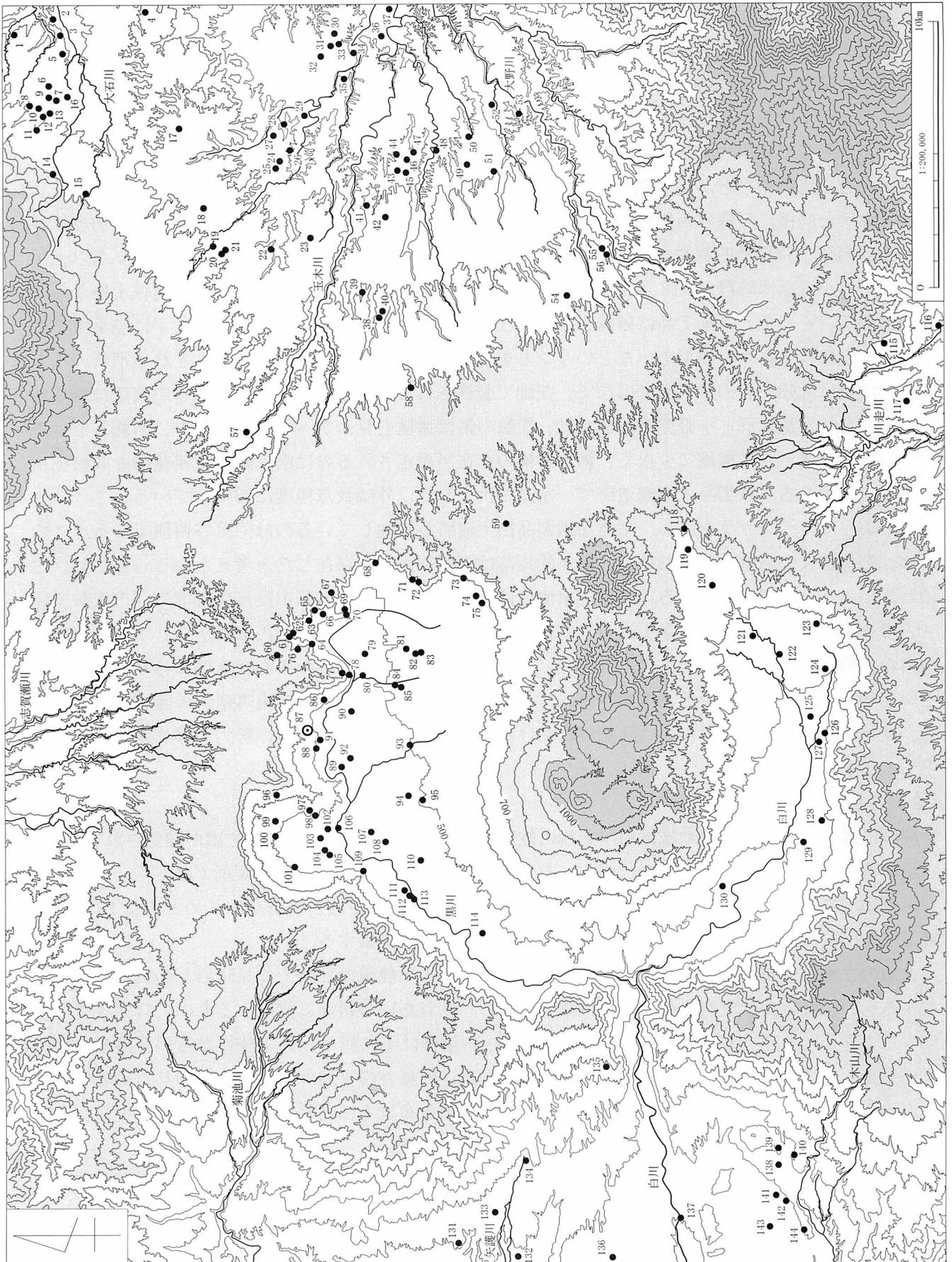
(2) 古墳時代

阿蘇における古墳 阿蘇地域は白川上流に位置し、そこにはおよそ260基の古墳が確認されている。古墳の種類は、前方後円墳、円墳、横穴、方形周溝墓、円形周溝墓、石蓋土壙墓である。

阿蘇地域には56の古墳群が存在する。このうち、阿蘇谷には中通古墳群をはじめとする18群、南郷谷に12群、小国盆地に2群、阿蘇外輪山の外側に24群が位置する。

古墳の立地と分布 古墳を立地の面からみると、①山麓線の丘陵上で見晴らしの良い高所に存在するもの、②カルデラ内の平坦地に位置するもの、③谷あいの斜面に位置するものの3タイプに大別することができる(島津1982)。大部分の古墳・古墳群は①に属し、弥生時代からの集落遺跡とは立地を全く異にしている。②に含まれる中通古墳群は、阿蘇谷の平地部に位置しており、その規模や内容からも重要性がうかがえる。なお、阿蘇地域の古墳分布は主に阿蘇谷の黒川流域に集中し、高い分布密度を示す。南郷谷は阿蘇谷に比べ古墳の分布密度が低い。

古墳時代前期 古墳時代前期の阿蘇地域の様相は不明確だが、阿蘇谷では箱式石棺の存在が確認されている。これは弥生時代後期以来受け継がれてきた在地的な特徴をもつ。箱式石棺は阿蘇谷東側のカルデラ壁下周辺で多数発見されている。また、阿蘇谷平地部で発見された阿蘇市村下石棺は、その棺外に二重口縁壺がすえ置かれており、その土器から前期に比定される。この周囲にも数基の石棺が



第3図 阿蘇地方の古墳分布図 (番号は第1表に対応)

第1表 阿蘇地方の古墳地名表(2)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期(世紀)	副葬品・出土品	備考	文献	
24	法地坊横穴墓群	大分県竹田市古園法地坊	横穴	6世紀末～7世紀後半	須惠器片(甕) 土師器片 須惠器(坏蓋・高坏・壺・平瓶・横瓶・甕)、 土師器(高坏・大甕)、ガラス小玉(7) 土師器(坏) ガラス小玉(3)、須惠器(坏蓋・坏身・ 甕)、土師器片(高坏・碗)	左側に2段、右側に1段の飾り縁残存 両側に3段の飾り縁残存 東側に2段の飾り縁残存	7, 14, 20		
								6号横穴墓	
								7号横穴墓	
								8号横穴墓	
								9号横穴墓	
								10号横穴墓	
								11号横穴墓	
								12号横穴墓	
								13号横穴墓	
								14号横穴墓	
								千人塚	
								無名塚	
								刀塚	
								甲冑塚	
25	座主横穴群	大分県竹田市上坂田座主	横穴			11基	7		
26	谷川古墳	大分県竹田市上坂田					14		
27	宇土古墳群	大分県竹田市下坂田福原	円墳				6		
								千人塚	
28	御祖神社石棺	大分県竹田市下坂田谷川	角形石棺				6		
								舟ノ辻古墳	
29	舟ノ辻古墳	大分県竹田市下坂田上久保	舟形石棺				3		
30	成迫横穴群	大分県竹田市上平田成迫	横穴			2基	6, 7		
31	上平田横穴群	大分県竹田市上平田	横穴				7		
32	十一横穴	大分県竹田市平田十一	横穴				6		
33	下原横穴群	大分県竹田市平田	横穴				3		
34	南光寺横穴群	大分県竹田市平田南光寺	横穴				5基		
35	市用横穴群	大分県竹田市下志土知市用	横穴				11基、羨道部に朱		
36	鶴原横穴群	大分県竹田市君ヶ園	横穴				3		
37	扇森山横穴	大分県竹田市玉来深瀬	横穴	5世紀末～6世紀初頭	横柄板鋳留短甲、鉄刀(3)、鉄鏃	7, 12, 20			
							横穴		
38	塚園遺跡	大分県竹田市小塚	周溝墓	割竹形木棺	5世紀初頭	鋳、刀子、劍、土師器	方形周溝墓(3)、円形周溝墓(1)	7	
									周溝墓
39	小塚古墳群	大分県竹田市小塚石丹	円墳	角形石棺	5世紀中葉			3, 6	
									石舟古墳
									小塚古墳
40	田代遺跡	大分県竹田市小塚田代	方形周溝墓	方形周溝墓	5世紀			14	
									1号墓
									2号墓
41	楠野遺跡	大分県竹田市今楠野	方形周溝墓	方形周溝墓	4世紀初頭	鏃、土師器	7基	6, 7	
									3号墓
42	蜘蛛塚古墳	大分県竹田市菅生塚原	円墳	鉄刀	4世紀			6	
									鉄刀
43	小園遺跡	大分県竹田市戸上小園	方形周溝墓	方形周溝墓	4世紀		消滅	6, 7	
									消滅
44	政所遺跡	大分県竹田市向山田	円墳	方形周溝墓				3	
									方形周溝墓
45	大塚遺跡	大分県竹田市戸上	円墳	角形石棺			埋葬後開棺された可能性	3	
									角形石棺
46	七ツ森古墳群	大分県竹田市戸上	前方後円墳	組合せ式石棺	4世紀	管玉(2)、小玉(8)、特殊玉(4)、勾玉(2)、碧玉製石鈿破片、鹿角製刀子(10)、鏡(4)、人骨(男1・女1)	6		
								円墳	
								組合せ式石棺	
								組合せ式石棺	
47	古川横穴	大分県竹田市荻町南河内古川	横穴				3		
								横穴	
48	仲村横穴	大分県竹田市荻町南河内仲村	横穴				7		
49	内釜遺跡	大分県竹田市荻町馬場内釜	横穴				3		

第 1 表 阿蘇地方の古墳地名表 (3)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期(世紀)	副葬品・出土品	備考	文献
50	高城古墳	大分県竹田市荻町恵良原高城						
51	立石古墳	大分県竹田市荻町恵良原立石						3
52	井戸古墳	大分県竹田市荻町馬背野井戸						3
53	嶋田横穴	大分県竹田市荻町相原嶋田	横穴				1基	3
54	叶野・西遺跡	大分県竹田市柏原百木迫	円墳					7
55	白水横穴群	大分県竹田市柏原白水	横穴				3基	3
56	辻横穴群	大分県竹田市柏原辻	横穴					7
57	平川横穴	熊本県産山村山鹿平川	横穴				風化し、形状・数不明	3
58	茶臼塚古墳	熊本県阿蘇市小池野	円墳					3
59	竜塚古墳	熊本県阿蘇市波野新波野						3
60	尾壺古墳	熊本県阿蘇市一の宮町尾壺						3
61	西手野古墳群	熊本県阿蘇市一の宮町手野西手野	円墳	横穴式石室	6世紀中葉			21
62								13, 21, 22, 23, 25, 26
63	上御倉古墳	熊本県阿蘇市一の宮町手野平井	円墳	横穴式石室		剣(2)、短刀(2)、鏃(10)、勾玉(9)、水晶六角玉(4)、管玉(8)、金環(2)、高坏(1)、桃杵(3)、轆(3)、土焼徳利(3)、土焼瓶(2)		13, 21, 22, 25
	下御倉古墳							
	1号墳							
	2号墳							
	3号墳							
	1号墳							
	2号墳							
	3号墳							
64	迎平古墳群	熊本県阿蘇市一の宮町手野橋詰	円墳					10, 15, 19, 21, 22, 25
65	東手野古墳群	熊本県阿蘇市一の宮町手野	円墳	横穴式石室	4世紀	須恵器	朱のついた平石、明治年間に消滅	10, 13, 21, 22, 25
66	平井古墳	熊本県阿蘇市一の宮町手野	円墳	石棺				11
67	城山横穴群	熊本県阿蘇市一の宮町三野城山	円墳	横穴				11
68	生田古墳群	熊本県阿蘇市一の宮町古城三閑	円墳	箱式石棺			18基	10, 22, 25
69	三閑古墳	熊本県阿蘇市一の宮町古城三閑	円墳	石棺				11
70	鬼塚古墳	熊本県阿蘇市一の宮町坂梨鬼塚	円墳	箱式石棺				21
71	番田古墳群	熊本県阿蘇市一の宮町坂梨番田	円墳	箱式石棺	5世紀前半	堅飾(1)、内行花文鏡(1)、直刀(1)、鉄剣(1)、人骨	1号墳のみ調査、7基	10, 22, 25
72	神石	熊本県阿蘇市一の宮町坂梨南神石	円墳	石棺				11
73	端塚古墳	熊本県阿蘇市一の宮町坂梨端塚	円墳					11
74	豆塚古墳	熊本県阿蘇市一の宮町坂梨豆塚	円墳				封土が豆の形	11

第1表 阿蘇地方の古墳地名表(4)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期(世紀)	副葬品・出土品	備考	文献	
76	二俣筒横穴群	熊本県阿蘇市一の宮町中通北山		横穴			少なくとも5基	11	
77	大石平古墳	熊本県阿蘇市一の宮町中通大石平		石棺		剣、玉、須恵器	消滅	10, 13, 21, 22	
78	小嵐山古墳	熊本県阿蘇市一の宮町中通大石平	円墳	石棺	5世紀後半	鉄剣(2)、鉄鏃(8)、土師器、須恵器		22	
79	栗師藝古墳	熊本県阿蘇市一の宮町中通勝負塚	円墳					11	
80	鞍掛塚A古墳	熊本県阿蘇市一の宮町中通勝負塚	前方後円墳	円墳			盗掘跡	10, 13, 21, 25	
	鞍掛塚B古墳								盗掘跡
	上鞍掛塚A古墳								周濠を損失
	上鞍掛塚B古墳								
	長目塚古墳								盗掘跡
	勝負塚古墳								周濠を損失
	車塚A古墳								
	車塚B古墳								
	銭亀塚古墳								
	入道塚古墳								
休塚古墳									
81	勇子古墳	熊本県阿蘇市一の宮町宮地勇子	円墳	石棺		朱塊(伝)、銀環(伝)		11	
82	阿蘇神社福隆古墳1	熊本県阿蘇市一の宮町宮地	円墳					11	
83	阿蘇神社福隆古墳2	熊本県阿蘇市一の宮町宮地	円墳					11	
84	不動塚古墳	熊本県阿蘇市一の宮町宮地塩塚	円墳					11	
85	塩塚古墳	熊本県阿蘇市一の宮町宮地塩塚	円墳	横穴式石室	6世紀中葉	轆(1)、杏葉(1)、雲珠(1)、鉄矛(1)、勾玉(1)、鉄鏃、須恵器(小型蓋・甕形甌瓶)、管玉(4)、水晶玉(1)	石室石材に赤色顔料付着、消滅	10, 15, 21, 22, 25	
86	鳥越古墳	熊本県阿蘇市山田				剣(1)、堅師(1)、人歯(2(体分))		11	
87	1号墳	熊本県阿蘇市山田平原	円墳	石棺				16, 18, 25	
	2号墳								
	3号墳								
	4号墳								
	5号墳								
	6号墳								
	7号墳								
	8号墳								
88	今古閑古墳	熊本県阿蘇市山田今古閑		横穴				21	
89	塔の本古墳	熊本県阿蘇市山田		石棺	4世紀			17	
90	村下石棺	熊本県阿蘇市小野田村下		箱式石棺	4世紀	土師器(二重口縁蓋)	農業基盤整備時に発見	18, 19, 22, 25	
91	坪内古墳	熊本県阿蘇市小倉坪内		石棺				11	
92	大角田石棺	熊本県阿蘇市小倉		石棺				18	
93	道尻古墳群	熊本県阿蘇市役夫原道尻		石棺				18	
94	北塚古墳	熊本県阿蘇市黒川		竪穴式石室				19	
95	本塚古墳	熊本県阿蘇市黒川						19	

第 1 表 阿蘇地方の古墳地名表 (5)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期(世紀)	副葬品・出土品	備考	文献			
96	源太ヶ塚古墳群 源太ヶ塚古墳	熊本県阿蘇市南宮原村上		横穴式石室、箱式石棺		金環		18, 23, 25			
97	御塚横穴群 御塚古墳 A号墳 B号墳 3号墳 4号墳 5号墳	熊本県阿蘇市南宮原		横穴	5世紀後半頃	刀子(1)、ガラス小玉(203)、須恵器	10数基	8, 10, 18, 23, 25			
		熊本県阿蘇市南宮原			7世紀	土師器(壺)、馬具		23			
		熊本県阿蘇市南宮原前田		横穴		刀子(1)、ガラス小玉(87)	昭和7年道路工事で破壊				
						ガラス小玉(116)、須恵器(壺)		15, 16, 19, 21			
99	湯浦古墳	熊本県阿蘇市湯浦						11			
100	原の上古墳	熊本県阿蘇市湯浦		石棺				11			
101	二本松石棺群	熊本県阿蘇市西湯浦二本松		石棺			昭和25年開墾時に石棺5基以上	16			
102	塔ノ木古墳群 1号墳 2号墳 3号墳 4号墳 5号墳 6号墳 7号墳 8号墳 9号墳	熊本県阿蘇市小里原口	円墳								
103	小里古墳群 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇市小里	円墳					7基			
104	湖の上古墳 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇市小里	円墳					墓地として利用			
105	下の原古墳 番出石棺	熊本県阿蘇市小里	円墳					3基			
106	浜川古墳群 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇市内牧		石棺				19			
		熊本県阿蘇市三久保	円墳					18			
		熊本県阿蘇市三久保	円墳					18			
107	甲賀古墳 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇市三久保						18, 19, 21			
108	三久保横穴 1号墳 2号墳 3号墳 4号墳	熊本県阿蘇市三久保		横穴				11			
109	下山西石棺群 1号墳 2号墳 3号墳 4号墳	熊本県阿蘇市乙姫		石棺	3世紀~4世紀	ガラス玉 鉄剣 鉄剣 鉄剣		18, 19			
		熊本県阿蘇市狩尾	円墳								
		熊本県阿蘇市狩尾	円墳						円墳2基・石棺1基あったが消滅		
		熊本県阿蘇市狩尾	円墳						跡場整備で消滅		
110	古園石棺群 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇市石		石棺				3基以上			
111	宮山石棺 朱詰の塚古墳(下切古墳) 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇郡高森町下切馬場ノ下		石棺				昭和46年学校整地で出土			
112	高塚横穴群 1号墳 2号墳 3号墳	熊本県阿蘇郡高森町草部南桑迫		横穴				11			
113	土行松古墳	熊本県阿蘇郡高森町草部南桑迫		横穴式石室				25			

第1表 阿蘇地方の古墳地名表(6)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期(世紀)	副葬品・出土品	備考	文献
118	中大村古墳群	熊本県阿蘇郡高森町上色見中大村	方形周溝墓	1963年調査石棺	6世紀末	鉄剣(1)、人骨(3) 壺(5)、人骨(男1・女1・不明1) 人骨(女1)		10, 16, 22, 25, 27
				1986年調査石棺(1号)				
				1986年調査石棺(2号)				
119	上色見の石棺	熊本県阿蘇郡高森町上色見下大邑	方形周溝墓					11
120	米塚古墳	熊本県阿蘇郡高森町色見小倉原	円墳					11
121	長塚古墳	熊本県阿蘇郡高森町色見下中山						11
122	豆塚古墳	熊本県阿蘇郡高森町高森	円墳				別名馬見塚	1
123	上の園古墳群	熊本県阿蘇郡高森町高森上の園	円墳	1号墳	6世紀末	大刀(1)、鉄環、刀子(1)、鉄鏃(1) 直刀(3)、馬具、須恵器 直刀(3)、刀子(1)、鉄鏃(14)、馬具、須恵器		1, 10, 22, 25
				2号墳				
				3号墳				
				4号墳				
124	幅瀬古墳	熊本県阿蘇郡南阿蘇村岡併幅					県道工事の時破滅、4基残存	11
125	中郷	熊本県阿蘇郡南阿蘇村岡併中郷					現状1基	11
126	六の小石古墳群	熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石六の小石	円墳			金銅製鈴、水晶製切子玉、刀子、鉄鏃、須恵器		10, 16, 22, 25
127	六の小石	熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石						11
128	経塚古墳	熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石						11
129	柏木谷古墳群	熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石	方形周溝墓	箱式石棺	弥生~古墳時代	土師器、鉄鏃	12基	10, 11, 25
				円形周溝墓				
130	下田の石棺群	熊本県阿蘇郡南阿蘇村下田	円墳	箱式石棺、土壙	6世紀	人骨	小円墳数基	22
				組合せ式石棺				
131	横道石棺群	熊本県阿蘇郡市廻志麓						11
132	一尾列2地点	熊本県菊池郡大津町矢護川一尾列						11
133	馬藪塚古墳群	熊本県菊池郡大津町矢護川御願所	円墳					11
134	真木古墳	熊本県菊池郡大津町真木	円墳					11
135	瀬田裏古墳群	熊本県菊池郡大津町瀬田						11
136	後追磯古墳群	熊本県菊池郡大津町後追						11
137	岩坂嶺穴	熊本県菊池郡大津町岩坂				須恵器		11
138	將軍塚古墳	熊本県阿蘇郡西原村宮山高下	円墳					11
139	にれやま石棺群	熊本県阿蘇郡西原村宮山奈良山						11
140	宮山神社境内石棺群	熊本県阿蘇郡西原村宮山西原						11
141	あかどう石棺群	熊本県阿蘇郡西原村布田北平						11
142	下布田石棺群	熊本県阿蘇郡西原村布田古閑						11
143	化粧塚	熊本県阿蘇郡西原村布田化粧塚						11
144	秋田石棺	熊本県阿蘇郡西原村河原秋田原				鉄刀		11

第1表に関する参考文献

- 今村俊男 1979 「沿革 概要」『高森町史』 高森町：pp. 78-100
- 岩崎充宏・山下志保編 1994 「中通古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室報告』第1集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-47
- 大分県教育委員会 1993 『大分県遺跡地図』
- 甲斐善義編 2004 『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』 大分県教育委員会
- 甲斐善義編 2006 『山脇横穴墓』 大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 賀川光夫 1983 「古墳文化」『竹田市史』 竹田市史編集委員会：pp. 163-214
- 賀川光夫 1989 「古墳時代」『大分県史 先史編II』 大分県：pp. 311-435

8. 清田純一 1982 「阿蘇谷の遺跡」『陣内遺跡』阿蘇町文化財調査報告第2集 阿蘇町教育委員会：pp. 6-31
9. 樺浦幸徳編 2005 『原田第三遺跡・久住遺跡（久住御茶屋跡）』久住町教育委員会
10. 隈 昭志 1999 『長目塚と阿蘇国造』一の宮町
11. 熊本県教育委員会 1998 『熊本県遺跡地図』
12. 小林昭彦・小柳和宏編 1987 「昭和61年度調査の概要」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅱ』竹田市教育委員会：pp. 219-243
13. 坂本経亮編 1962 『熊本県文化財調査報告』第3集 熊本県教育委員会
14. 真田博幸・玉川剛司編 2007 『法地坊横穴墓群 古園浦久保遺跡』竹田市教育委員会
15. 島津義昭編 1980 「塩塚古墳 阿蘇郡一の宮町大字宮地塩塚所在古墳の調査報告および阿蘇谷の古墳関連資料の紹介」『車塚古墳・川田京評遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳』熊本県文化財調査報告第46集 熊本県教育委員会：pp. 1-23
16. 島津義昭 1982 「阿蘇の古墳」『えとのす』第19号 新日本教育図書：pp. 84-96
17. 島津義昭 1998 「国の始まり」『波野村史』波野村：pp. 172-177
18. 島津義昭 2004 「阿蘇の文獻・調査一覧」『阿蘇町史』第2巻 資料編 阿蘇町：pp. 131-144
19. 島津義昭 2004 「阿蘇の古墳時代」『阿蘇町史』第1巻 通史編 阿蘇町：pp. 180-186
20. 第4回九州前方後円墳研究会実行委員会 2001 『九州の横穴墓と地下式横穴墓（第Ⅱ分冊）』九州前方後円墳研究会
21. 高木隆綱・平岡勝昭 1982 「高地に於ける横穴古墳群の新発見」『阿蘇山の考古学』日・豊・肥・古文化研究会資料1 湯山シンポジウム実行委員会：pp. 45-46
22. 高木正文 1983 「阿蘇外輪山上の城山横穴群」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 66-68
23. 富田統一編 1985 『源太ヶ塚古墳発掘調査報告書—阿蘇郡阿蘇町、熊本県青少年野外活動センター内所在』熊本県教育委員会
24. 野田拓治 1983 「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 38-49
25. 野田拓治 2007 「古墳時代」『白水村史』白水村：pp. 86-120
26. 原口長之 1984 「上御倉古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp. 73-74
27. 北條唯幸 1983 「中部九州古墳時代における阿蘇地方人の特徴」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 106-107
28. 宮内克己編 2001 『都野原田遺跡』大分県教育委員会・久住町教育委員会
29. 宮内克己編 2002 『小城原遺跡・中原遺跡』大分県教育委員会・久住町教育委員会
30. 宮内克己編 2002 『仏原千人塚古墳群』大分県教育委員会・久住町教育委員会



存在し、これらは方形周溝墓の主体部であった可能性がある。

一方、南郷谷では周溝墓や箱式石棺が阿蘇谷よりも顕著に見出される。その代表的な例が高森町中大村古墳群で、推定6基以上の箱式石棺が存在し、うち1963年調査石棺では3体の人骨と鉄剣1点が出土した。また、1986年調査石棺の2基は方形周溝墓の主体部であることが明らかになっている。

古墳時代中期 古墳時代中期には阿蘇谷を中心に墳丘をもつ大規模な古墳が築造されるようになる。なかでも阿蘇谷東側に位置する中通古墳群は、阿蘇谷のみでなく当該期の熊本県地域においても中心的な古墳群のひとつと考えられる。中通古墳群は、現存するものが10基、消滅・推定を合わせて14基以上の古墳で構成されていたと思われる。円墳が主であるが、長目塚古墳や上鞍掛塚A古墳のような大規模な前方後円墳も含む。これらの前方後円墳はいずれも前方部の幅が狭長で、高さも低いことが特徴である。同様の形状をとるものとして、古墳時代前期に属するものではあるが大分県竹田市七ツ森古墳群に築かれたB号墳やC号墳があげられ、この地域との密接な関係がうかがえる。

長目塚古墳は阿蘇地域の古墳のなかでは傑出した規模を誇る前方後円墳であり、復元墳長111.5mで周濠をもつ。長目塚古墳は1949・1950年に東岳川改修工事により前方部が削平され、それに伴い発掘調査が実施された。その結果、前方部主体部は竪穴式石室で被葬者は女性であることが確認された。また仿製内行花文鏡をはじめ、鉄刀や鉄鏃、玉類など多数の副葬品が出土した。石室出土の鉄鏃や前方部墳丘上出土の須恵器はTK 216型式期に位置づけられる。また墳丘からは壺形埴輪と円筒埴輪が多数検出されたが、これらは石室出土遺物や須恵器より若干古く位置づけられる可能性がある。

ほかに、今回発掘調査を行った平原古墳群も古墳時代前期から中期に位置づけられ、2000年公表の遺跡地図では8基の円墳の存在が示されている。しかし本書第二章で述べるように、遺跡地図に示された古墳分布には誤りがあると思われるため、今後再検討する必要がある。

一方南郷谷でも、古墳時代中期には墳丘をもつ古墳が築造されるようになる。墳形は円墳で阿蘇谷に比べて大規模なものは少なく、また前方後円墳も存在しない。この時期の古墳群の代表例として、南阿蘇村^{かやのきだに}柏木谷遺跡があげられる。柏木谷遺跡は、古墳時代のものでは方形周溝墓・円形周溝墓の他、円墳も1基確認されている。これらは最初に木棺を主体とする方形周溝墓が出現し、箱式石棺を主体とする方形周溝墓に変化した後、円墳や箱式石棺を主体とする円形周溝墓、土壙墓へと変遷していく。このように柏木谷遺跡は、周溝墓から明確な墳丘を有す円墳への変遷を追うことができる古墳群として重要である。これと同様の変遷過程を辿る古墳群として、熊本市城南町塚原古墳群や合志市八反原遺跡が存在する。南郷谷のその他有力な古墳群として、高森町上の園古墳群がある。上の園古墳群は4基の古墳から構成され、うち1基は割石小口積みの小型横穴式石室、もう2基は安山岩製箱式石棺を主体部としている。これらからは鉄刀や須恵器など多くの副葬品が出土した。

なお、宮崎県との県境である熊本県高森町には、古墳時代中期後葉に属すると考えられる高塚横穴群が存在する。この横穴群は、宮崎県西臼杵郡一帯に分布する横穴と同種の構造をとり、うち1基から横矧板鋌留短甲が出土している。

古墳時代後期 古墳時代後期に入ると、阿蘇谷では中通古墳群より東側に多くの古墳が築造されるようになる。この時期になると、主体部に横穴式石室が採用される。その代表例として、阿蘇市西手野古墳群に築かれた上御倉古墳・下御倉古墳があげられる。両者はともに円墳で、主体部は巨大な安山岩・凝灰岩切石を用いた複室構造の横穴式石室である。同様の構造をとる古墳は、福岡県南部から熊本県北部にかけて多く分布している。いずれも複室構造で後室に石屋形を設けること、多くが装飾古墳であることを特徴としており、それぞれの地域の有力な古墳と位置づけられている。ほかに、横

穴式石室を主体部とする古墳の中で、阿蘇市迎平古墳群は阿蘇地域の古墳文化を考える上で重要である。迎平古墳群は消滅したものを含め8基以上の円墳で構成され、そのうち6号墳からは環状乳画文帯神獣鏡が出土した。これの同型鏡が熊本県江田船山古墳と国越古墳、宮崎県持田2号墳、福岡県山ノ神古墳、香川県蛇塚古墳から出土しており、迎平6号墳の鏡は当該時期の中央政権が阿蘇地域に強力な働きかけを行ったことを示している。ほかに、阿蘇市塩塚古墳は横穴式石室墳とみられるが、馬具や武器が多く出土している点で重要な古墳である。

南郷谷では墳丘が小規模になり、横穴式石室や箱式石棺を主体部とする小円墳が群集して築造される。単室の横穴式石室である南阿蘇村六の小石古墳群1号墳が具体例としてあげられる。

古墳時代の阿蘇 弥生時代の阿蘇地域では、ベンガラ生産や鉄製品の使用により阿蘇谷西側が隆盛していたが、古墳時代に入ると阿蘇谷東側に大規模な古墳が築造されるようになり、西側の繁栄はみられなくなる。また弥生・古墳時代を通して南郷谷側よりも阿蘇谷側の方が有力である。

阿蘇地域の古墳築造の動向を概述すれば次のようになる。まず弥生時代の流れを引く箱式石棺や方形周溝墓が古墳時代前期に盛んに造られた後、中期に入り大規模な墳丘をもつ古墳が築造されるようになる。これらは前方後円墳を含んでおり、主体部は堅穴系の埋葬施設が主流であったと考えられる。続いて後期に入ると、主体部が横穴式石室になるとともに墳丘の規模が小さくなり、小円墳が群集して築造されるようになる。また横穴が出現し、小円墳の主体部には単室構造の横穴式石室や箱式石棺も用いられるようになる。

古墳時代の阿蘇地域における集落の動向は、圃場整備事業にともなった遺跡調査が行われていないため、不明なところが多い。弥生時代後期に阿蘇谷西側で大規模集落が営まれていたことがわかっているが、それらは古墳時代には継続しない。なお古墳の立地から検討すると、現在の阿蘇市域中心部付近に古墳時代の集落が営まれていた可能性が考えられる。農耕の面では、出土遺物から弥生時代には既に水田耕作が行われていたことがわかっている。南郷谷は斜面の多い地形で、畑作が中心であったとみられている。阿蘇谷は平地が大部分を占めているが、東側に比べ西側は、その水質や土壌から水稲にあまり適していない。よって古墳時代の阿蘇では、特に阿蘇谷東側で盛んに農耕や水田耕作が行われていたと推測され、有力首長が登場する背景になったと考えられる。(河村)

(3) 奈良時代以降

大化改新の後、肥後国の成立にともない阿蘇郡が設置された。平安時代の『和名抄』によると、阿蘇郡は波良郷・知保郷・衣尻郷・阿蘇郷の4郷であったとされ、阿蘇郷が現在の阿蘇市周辺に比定されている。阿蘇郡には当時、二重・蛟藁の2箇所に駅が設置されており、肥後国府と豊後国府を結ぶ要衝の地であった。同時に官牧として二重牧・波良牧が置かれ、駅伝馬の供給地としての役割も果たしていた。また条里制も施行されており、阿蘇市一の宮町周辺においてその遺構をみることができたが、1970年代以降の圃場整備によりほとんどが消滅した。

阿蘇郡を統治する郡司は、阿蘇国造であった阿蘇氏が務めた。郡衙は、大正院の地名の残る現在の阿蘇市一の宮町役犬原地区にあったと考えられている。平安時代後期、阿蘇氏は大宮司職に任命され、肥後国において菊池氏と並ぶ勢力を誇った。同時にこの頃、阿蘇山を信仰の対象とする山岳信仰が盛んになり、中岳火口付近に古坊中と呼ばれる寺坊が設置された。

阿蘇氏は南郷谷や現在の^{かみましき}上益城郡山都町浜の館に拠点を移しつつ、大宮司家として平安時代から室町時代にかけて繁栄を極めた。しかし、戦国時代末期における島津氏の侵攻や豊臣秀吉の九州平定の影響を受け、衰退の道を進むこととなった。(山元)

二 調査経過と古墳分布

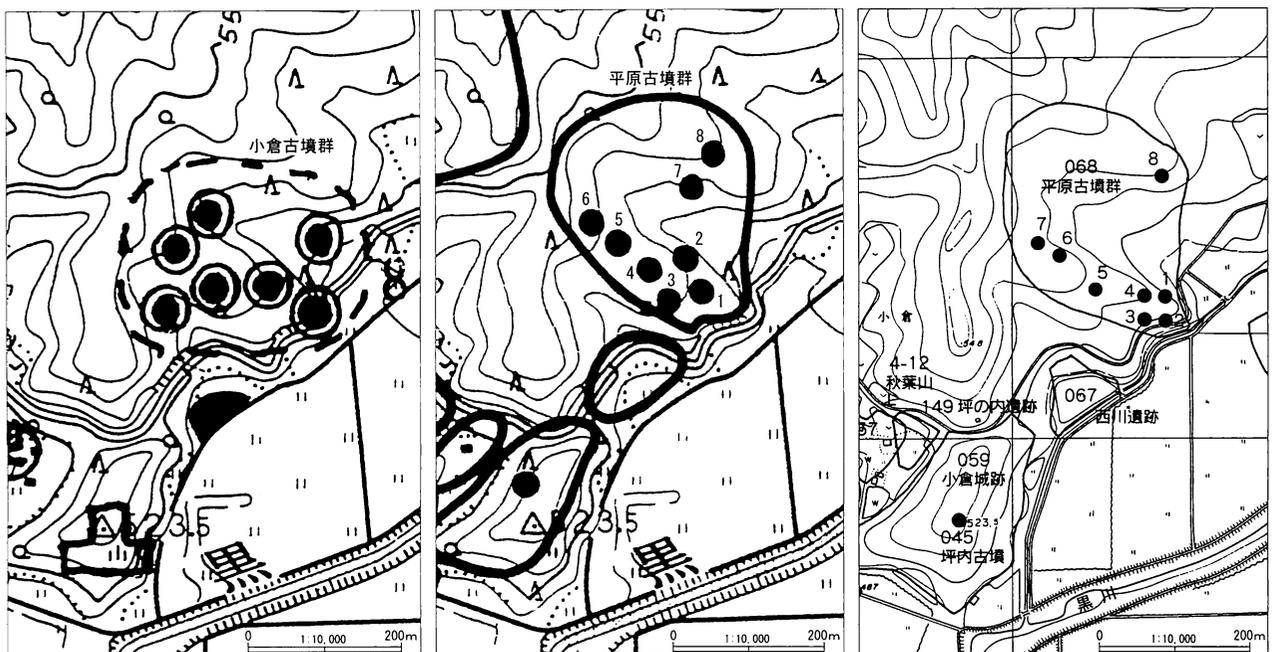
1. 過去の調査（第1次調査）

平原古墳群は、熊本県阿蘇市山田字平原に所在する。そこは、阿蘇谷北縁を画す外輪山から南へ大きく突出する遠見ヶ鼻（大観峰）と象ヶ鼻のほぼ中央にあたり、短く南へのびる低い尾根地形をなす。長目塚古墳のある中通古墳群からは北西方向に視認できる北外輪山の裾部である（第1・3図）。

平原古墳群の存在が確認されたのは1981年1月のことである。そのため、同年5月に発行された全国遺跡地図（文化庁文化財保護部1981）には記載されておらず、翌1982年3月発行の阿蘇町文化財調査報告第2集に掲載された遺跡地図（第4図①）においてはじめて「^{おくら}小倉古墳群」として登録された（清田編1982：pp.20-21）。古墳群の認識当初は、それが山田地区と小倉地区の境界に立地することから「小倉古墳群」と称されることもあったようだ（文化財研究会1983・1984など）。

さて、古墳群は県道213号線（内牧坂梨線）改修工事をきっかけに発見された。そのとき1号墳が発掘調査され、また1号墳の「背後の山腹中に、直径約20mの円墳3基と石棺1基」が存在することが指摘された。1号墳は「安山岩の組み合わせ式石棺で、全長1.87m、幅0.8mを測る。石室^{ママ}内からは2体分の歯と、剣1、壺1が発見された。墳頂は既に削平されていたが、小円墳とみられる」という（島津1982：p.89）。これは箱式石棺を主体部とする円墳と推測されるが、破壊され残存していない。なお、この調査に関する正式報告書は刊行されていない。

この発見の翌年から2年間、1982・1983年には熊本短期大学（現熊本学園大学）文化財研究会による2～4号墳の測量調査が実施された（第5図）。この段階において、平原古墳群には「墳丘を持つものが7基と2基の石棺が存在し、標高が低い方から号を付けてあった。しかし、1号墳は、道路改修によって現在消滅している」とされ（文化財研究会1983：p.83）、古墳数が発見時の4基から7基に増加している。この7基という古墳数は阿蘇町文化財調査報告第2集掲載の遺跡地図（第4図①）

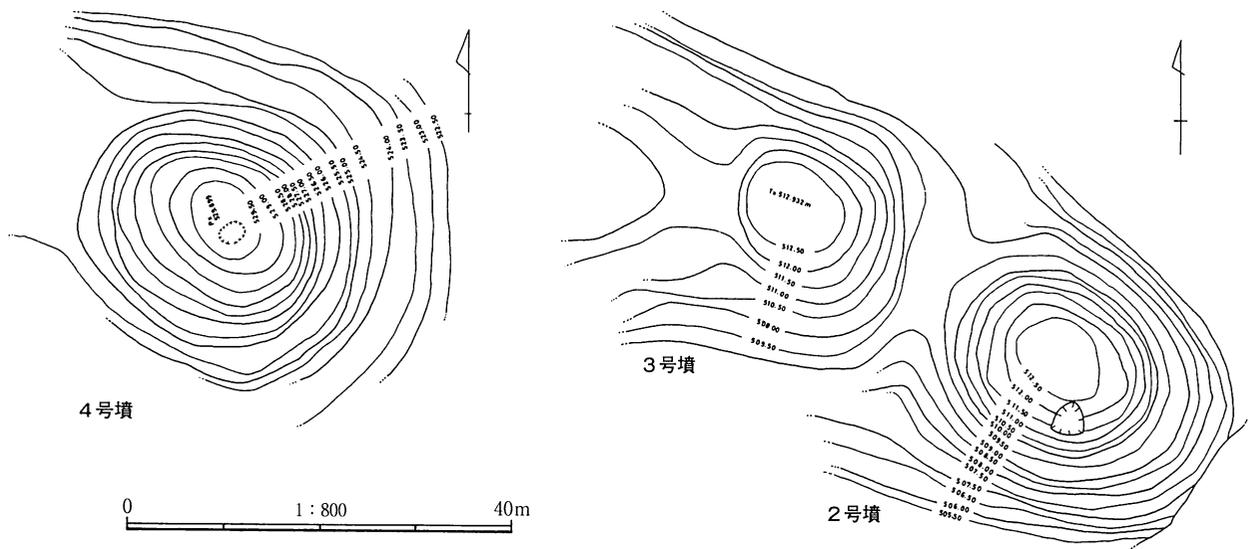


①1982年の遺跡地図（清田編1982）

②1998年の遺跡地図（熊本県教委1998）

③2000年の遺跡地図（緒方編2000）

第4図 平原古墳群を示した遺跡地図の比較



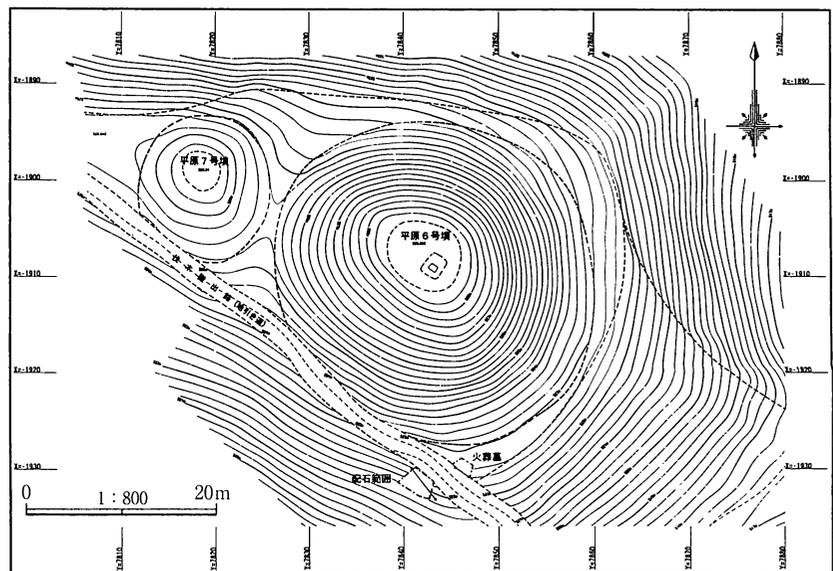
第5図 熊本短期大学文化財研究会による平原2～4号墳測量図

(清田編 1982 : p. 20) に示されたものと同じであり、この数がのちに作成された遺跡地図 (第4図②③) (熊本県教委 1998、緒方編 2000) にも影響を与えていると思われる。ただし、注意が必要なのは、このとき測量されたのは2～4号墳の3基のみである点で、これは当時明確に認識することができた古墳数を示している可能性がある。また、公表された測量図をみると (第5図)、当時4号墳とされたものが現在の6号墳にあると判断できる点も重要である。つまり、最新の遺跡地図 (第4図③) (緒方編 2000 : p. 35) に点が落とされている2～5号墳のどれが当時の2・3号墳であるのか正しく特定できないのである。これは古墳分布にかかわる問題であるため、のちに再考する。

その後今日まで、平原古墳群に所在する古墳の調査は実施されていない。しかし、1989年、古墳群近くの林道工事中に箱式石棺が不時発見された (阿蘇町教委 1989)。当時の記録によると、その位置は今回調査した6号墳 (平原490番地) からやや北西に離れた林道の西脇 (平原495番地) である。2000年発行の阿蘇町遺跡地図 (緒方編 2000) ではこの石棺 (小倉林道石棺) を7号墳に当てているが (第2表)、次に述べる2011年段階の認識 (緒方編 2011) および記録に残された位置関係からすればこれは誤認である。このことについても後述する。

2010年には、6号墳南側の樹木搬出路の溝状部北側法面で8世紀後半に位置づけられる火葬墓が検出され、平原B遺跡として遺跡地図に新規登録された。このとき、古墳の測量図も作成され、火葬墓北側の円墳を6号墳、そのすぐ西側にある小円墳を7号墳とする認識が示された (第6図) (緒方編 2011)。

今回の調査実施にあたってはこの2011年段階の認識にしたがっ



第6図 2011年公表の平原6・7号墳測量図

第2表 平原古墳群に分布する古墳号数の変遷

『阿蘇町遺跡地図』『附論 平原B遺跡』および『小倉林道石棺発掘資料』をもとにした古墳名称	『附論 平原B遺跡』の図3 (緒方編2011)	『阿蘇町遺跡地図』(緒方編2000)	『熊本県遺跡地図』(熊本県教委1998)	『熊本短期大学連合学会会報』第38・39集 (文化財研究会1983・1984)
1号墳 (1981年発見の石棺。消滅)		1号墳 (「昭和56年県道改修時に石棺を発見」「墳丘は既に削平されていたが、小円墳と推定される」)	1号墳 (図示された位置は『阿蘇町遺跡地図』の2号墳の場所)	1号墳 (「道路改修によって現在消滅」)
2号墳		2号墳 (「円墳」)	2号墳 (「円墳」) (図示された位置は『阿蘇町遺跡地図』の1号墳の場所)	2号墳 (『阿蘇町遺跡地図』に図示されたものとの対照困難)
3号墳		3号墳 (「円墳」)	3号墳 (「円墳」)	3号墳 (「北側で、石棺らしきものを発見」)(『阿蘇町遺跡地図』に図示されたものとの対照困難)
4号墳		4号墳 (「円墳」「箱式石棺」)	4号墳	
5号墳		5号墳 (「円墳」)	5号墳 (「円墳」)	
6号墳 (今回調査。阿蘇市山田490番地)	平原6号墳	6号墳 (「円墳」)	6号墳 (「円墳」)	4号墳
7号墳 (6号墳西に並存)	平原7号墳			
8号墳 (1～7号墳所在尾根北側の別尾根に所在)		8号墳 (「墳丘約20m、円墳」)	8号墳 (「円墳」)	
小倉林道石棺 (1989年発見。平原古墳群の北西、阿蘇市山田495番地に所在)		7号墳 (「墳丘不明、平成元年林道工事の際に箱式石棺単独出土」)		
—			7号墳 (8号墳の南に図示)	

だが、調査を進めるなかで各古墳の号数に混乱が生じていることに気付いた。さらに、これまでに知られていなかった古墳を新たに3基発見した。こうした点を含め、本章の最後で平原古墳群における古墳分布と各古墳の号数について整理し、今後の検討に備えたい。

なお、1981年から1983年までの一連の調査を、第1次調査と呼称する。(杉井)

2. 今回の調査(第2・3次調査)

調査に至る経緯 熊本大学文学部考古学研究室では2001年度から、熊本県地域における古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの1つとし、熊本市植木町高熊古墳や上天草市千崎古墳群、広浦古墳などの調査を継続的に行ってきた。そうした活動を通じて古墳の立地と交通ルートはきわめて密接な関係を有することを強く認識したが、九州本島の東西南北を結ぶ位置にある点で阿蘇地域の重要性は明らかであった。しかし、阿蘇地域の古墳の様相はほとんど明らかになっておらず、なかでも阿蘇市中通古墳群に築かれた前方後円墳、長目塚古墳は墳長100mを越える規模をもち、また前方部埋葬施設が発掘調査されているにもかかわらず、その副葬品や埴輪の内容、築造時期などに不明な点が多かった。そこで、阿蘇神社の協力を得て、2010年度に長目塚古墳出土遺物の再整理作業を開始した。また、阿蘇地域所在古墳の基礎データの収集作業にも着手し、その一環として平原古墳群の調査を計画した。平原古墳群は中通古墳群に近い丘陵上に立地し、そこに分布する古墳は大変良好に遺存する。そのため、そうした平原古墳群の実体を明らかにすることができれば、中通古墳群を中心とした阿蘇谷の古墳動向の解明に向けて重要な一歩を踏み出すことができると考えたのである。

第2次調査 そこでまず、2011年10月14・16・23日、11月1～7日、2012年4月29・30日の計12日間を使って、6・7号墳の測量調査を実施した。6・7号墳は古墳群のなかでももっとも高

所に位置し、とくに6号墳はその規模の大きさから古墳群の中心をなすものの1つと予想された。また、上述したようにこれら古墳については2011年に測量図が公表されていたが(第6図)(緒方編2011)、そこに描かれた等高線はやや単調のように思われた。こうした理由から、まずは6・7号墳を対象を選び、その測量から調査を開始することにしたのである。なお、この2011年から2012年にかけての測量調査を、第2次調査と呼称する。

調査はトータルステーションと電子平板を用いた変化点測量法(下村・吉田・玉川2003)によった。熊本大学にとって、墳丘測量をこうしたデジタル測量によって行うことははじめての試みであった。そのため、調査実施に先立ち別府大学の玉川剛司氏に何度か教えを受けた。調査終了後のデータ処理は主として杉井健が担当した。これら一連の作業を行うなかで、デジタル測量は従来の平板測量に比べて距離誤差に対する信頼度が格段に高く、また、より密度高く測点を設けることができるため、正確な測量図を描くうえでは相当な優位にあることを実感した。しかし、測量初心者が地形を読む力を養うという点ではまだ平板測量の方に大きな分があるように感じる。大学教育にとってはどちらがよりふさわしいのか、今後も試行錯誤していきたいと思う。なお、水準測量の起点とした公共点は黒川沿いに設置された「阿No.511」、また座標移動に用いたもう1つの公共点は「阿No.510」である。また、現地に設置した測量基準点のうちH1～H4は同一直線上に並ぶものである(第3表)。

第3次調査 第2次調査の成果を受け、第3次調査は、6号墳の墳丘規模および構造の解明を目的として、2012年8月19日から9月15日までの計28日間で実施した。調査区は当初、墳丘の四方に設ける予定であったが、調査期間と人員数を考慮し、東・北・西の3箇所限定した。調査区の名称は、それぞれ東1・北1・西1トレンチである。

東1および北1トレンチでは掘り下げ開始後ほどなくして、段築1段目の葺石が良好に遺存してい

第3表 平原古墳群基準点の現場座標

基準点名	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
H 1	0.000	0.000	529.532	6号墳墳頂
H 2	4.905	0.000	529.605	6号墳墳頂
H 3	28.342	0.000	527.395	7号墳墳頂
H 4	-16.739	0.000	523.664	
H 5	3.852	-7.374	527.635	
H 6	-1.618	-10.344	526.638	
H 7	-9.068	-5.066	526.103	
H 8	-5.944	5.548	526.691	
H 9	1.667	9.088	527.072	
H10	9.955	6.007	527.533	
H11	15.509	11.711	524.948	
H12	36.550	-0.238	526.542	
H13	25.017	-10.792	525.472	
H14	15.036	-13.514	524.848	
H15	-13.344	-10.655	523.812	
H16	-8.294	-15.279	523.991	
H17	-5.797	14.059	524.313	
H18	-1.946	-17.397	524.036	
H19	4.395	-17.816	523.988	
H20	-12.652	7.721	523.955	
H21	0.800	14.968	524.618	
H22	16.000	0.762	526.516	
E 1	-16.881	0.515	523.640	東1トレンチ下方
E 2	-10.376	0.521	525.617	東1トレンチ上方
N 1	0.091	16.346	524.399	北1トレンチ下方
N 2	0.703	10.370	526.414	北1トレンチ上方
W 1	19.849	1.358	526.006	西1トレンチ下方
W 2	12.847	1.149	527.817	西1トレンチ上方

第4表 平原古墳群基準点の国土座標(世界測地系)

基準点名	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
H 1	-1902.473	7860.136	529.532	6号墳墳頂
H 2	-1900.652	7855.582	529.605	6号墳墳頂
H 3	-1891.951	7833.822	527.395	7号墳墳頂
H 4	-1908.687	7875.677	523.664	
H 5	-1907.889	7853.822	527.635	
H 6	-1912.678	7857.798	526.638	
H 7	-1910.543	7866.674	526.103	
H 8	-1899.529	7867.714	526.691	
H 9	-1893.416	7861.962	527.072	
H10	-1893.200	7853.123	527.533	
H11	-1885.842	7850.084	524.948	
H12	-1889.125	7826.113	526.542	
H13	-1903.205	7832.903	525.472	
H14	-1909.438	7841.159	524.848	
H15	-1917.320	7868.570	523.812	
H16	-1919.738	7862.164	523.991	
H17	-1891.572	7870.738	524.313	
H18	-1919.348	7855.484	524.036	
H19	-1917.383	7849.441	523.988	
H20	-1900.002	7874.749	523.955	
H21	-1888.279	7864.950	524.618	
H22	-1895.826	7845.564	526.516	
E 1	-1908.262	7876.000	523.640	東1トレンチ下方
E 2	-1905.841	7869.963	525.617	東1トレンチ上方
N 1	-1887.263	7866.120	524.399	北1トレンチ下方
N 2	-1892.584	7863.333	526.414	北1トレンチ上方
W 1	-1893.843	7842.211	526.006	西1トレンチ下方
W 2	-1896.637	7848.635	527.817	西1トレンチ上方

ることを確認した。また、葺石基底石の外側には平坦面が形成されていること、しかし周溝となるような掘り込みは存在しないことを確認した。さらに、東1トレンチでは墳端平坦面をなす土層を若干掘りすぎてしまったが、逆にそのことによって盛土の様子を知ることができた。すなわち、東1および北1トレンチ部分では、地山をアカホヤ層に達するまで整地することによって墳端平坦面が形成されていること、また、盛土はアカホヤやその下層のローム土、さらにアカホヤ層上部に存在する黒ボク土が混じった土層で構成され、葺石基底石はその盛土上に乗ることが明らかとなった。

他方、西1トレンチでは段築1段目のほかに2段目の葺石も検出し、また1段目と2段目のあいだのテラス面には小礫が敷かれていることも確認した。この結果、6号墳の墳丘は2段築成の可能性が高いと推測された。しかし、1段目葺石は遺存状態が大変悪く、基底石から数石を残してすべて失われていた。そのため、墳丘残存面の確認がきわめて困難で、盛土の一部を断ち割ることによってそれを確定した。この過程で、西1トレンチ部分では、墳端はアカホヤ層下位のローム層に達するまでの整地が行われることによって形成されていると判断された。ただし、トレンチを一部拡張して調査したが、今回の調査範囲のなかでは墳端平坦面の範囲等は確認できなかった。

以上のトレンチ調査の結果、6号墳の墳形は円墳で、その東西の直径はおよそ31mと推測された。また、壺形埴輪や土師器が出土したが、原位置に留まるものはなかった。

なお、8月23日には宿舎の山田公民館で地元説明会を行い、夜の開催であったにもかかわらず20名余りの参加者を得た。9月1日の現地説明会には、阿蘇地域以外からの方も含め約70名の参加者があった。今回の発掘調査は、2008年以来4年ぶりに古墳を対象とするものであり、また阿蘇地域という新たなフィールドでの実施となった。そのため、古墳調査の経験をもたない学生がほとんどであり、またはじめての土地での合宿生活ということもあって、参加者一同かなりの緊張感をもって臨んだが、地元住民の方々や自治体からの惜しみないご援助を受け、何とか当初予定していた期間内に調査を終えることができた。心からの感謝の念を捧げたい。

今後の課題 今回の調査成果を受けて今後の課題を整理すると、およそ次のようになる。

平原古墳群全体については、次項で述べるように、古墳分布の確認が急務である。6・7号墳以外の墳丘測量調査も実施されなくてはならない。また、未報告の1号墳関連資料を探索し公にすることも必要である。

6号墳については、墳丘の東・北・西の3箇所では墳端を確認したにすぎないため、少なくとも南側における墳端位置確認は必須である。この四方以外においても墳端位置を確認することができれば、さらに確実な墳丘形態復元が可能となる。また、段築2段目を検出したのは西側の1箇所のみであるから、テラス面も含め、それらが墳丘全体のどの位置に築かれているのかを明らかにする必要がある。さらに、墳頂平坦面の構造や範囲も確認されるべきである。くわえて、壺形埴輪樹立状況の調査も必要である。もちろん、将来においては、埋葬施設の内容も解明されなければならない。

このように多くの検討課題を残しているが、次年度以降も継続的に調査を実施し、不明な点を着実に明らかにしていきたいと考えている。

(杉井)

3. 古墳の分布と号数

6・7号墳が所在する尾根の古墳分布 第3次調査では、6号墳の発掘調査と並行して平原古墳群における古墳分布も調査した。

まず、6・7号墳から尾根筋を南東に下った場所に2基の円墳が存在することを確認した。位置は

県道 213 号線（内牧坂梨線）のすぐ北側であり、6・7号墳からは若干の距離がある。2基のうち下方の円墳の方が規模が大きく、その墳丘斜面には葺石らしき円礫が観察される。2基はきわめて近接し、人為的に掘り込まれたと思われる溝状部によって区画される。上方の円墳の区画溝側は、直線的な外形を呈している。なお、これら2基の周辺も探索したがほかの古墳の存在は認められなかった。6・7号墳とのあいだにも古墳は存在しない。こうした点から、6・7号墳が所在する尾根上には、現状で4基の円墳が確認できる。

ところで、上述した2基の円墳について現地地形を詳細に観察したところ、これらはかつて熊本短期大学文化財研究会によって測量された2・3号墳（第5図）に相当することが明らかとなった。先にも指摘したように、当時測量された4号墳は現在の6号墳に当たるため、現状で確認できる4基のうち、7号墳を除いた3基の円墳が1982・1983年段階に測量されていたことになる。さらに重要なのは、これら測量対象古墳に2・3・4号墳という連続した番号が付与されている点である。つまり、当時においても、2・3号墳の周辺および当時の4号墳（現在の6号墳）までのあいだにはほかの古墳の存在が認められていなかったことを確認できるのである。

しかし、最新の遺跡地図（第4図③）（緒方編 2000）や認識（第6図）（緒方編 2011）においては、当時の4号墳が6号墳とされ、また2・3号墳とのあいだに新たに4・5号墳が追加されている。上述したように、平远古墳群に7基以上の古墳が存在するとの認識は1982年に公表された遺跡地図（第4図①）（清田編 1982）の影響を受けたものと思われるが、最新の遺跡地図（第4図③）で4・5号墳とされているものがはたして実際に存在するのかどうかについては再考の余地が十分にある。現状の古墳分布および熊本短期大学の報告内容（文化財研究会 1983・1984）をもとに考えれば、当時の2・3・4号墳（4号墳は現在の6号墳）に現状の7号墳をくわえた4基が現存する古墳であると判断すべきなのではなかろうか。つまり、1981年に失われた1号墳をあわせると、現状の6・7号墳が所在する尾根上には5基の円墳が存在したと理解されるのである。なお、1989年発見の箱式石棺（小倉林道石棺）を1つの円墳として数えることが許されるとすれば、現状の7号墳の北西側にもう1基の古墳を追加することも可能である。

以上のように考えてよければ、現在知りうる古墳分布にとっては、熊本短期大学が与えた号数をもっともふさわしいものと思量される。すなわち、6号墳を4号墳と呼んでいたときの古墳の数え方である。しかし、今古墳名称を変更すればいたずらに混乱を招くだけであると思われたため、今回は2011年段階の認識（第6図）（緒方編 2011）のままとした。

谷部をはさんだ北側尾根の古墳分布 6・7号墳が所在する尾根の北側にはけわしい谷部があり、それをはさんだ北側の別尾根には、最新の遺跡地図において8号墳が単独で存在することが記されている（第4図③）（緒方編 2000）。今回、別府大学の田中裕介氏らの協力を得て、その周辺の古墳分布を調査したところ、8号墳の北西側において新たに3基の円墳を確認した。樹木のために視界が悪く、尾根筋を直線的に歩いただけであるので、これですべてであるのかどうかは確証がない。しかし、8号墳が所在する尾根上に少なくとも4基の円墳が存在することは確実である。

今後の対応 以上のように、現状で確認できる場所では、6・7号墳が所在する尾根上には5基（7号墳北西側の石棺をくわえれば6基）の、また8号墳が所在する尾根上には4基の円墳が分布する。こうした状況は遺跡地図（第4図③）（緒方編 2000）に示されている内容とは大きく異なっている。今後、古墳群全体の古墳分布をさらに詳細に調査したうえで、あらためて各古墳にどのような番号を与えるべきなのかを議論する必要があるだろう。（杉井）

三 墳丘の構造

1. 墳丘の現状（第7図）

平原古墳群6号墳（以下、平原6号墳と記述）は熊本県阿蘇市山田字平原490番地に所在する円墳である。阿蘇谷の北側、遠見ヶ鼻（大観峰）と象ヶ鼻の間から南に突出する尾根上に位置し、現在は植林された杉に覆われているが、樹木がなければ中通古墳群とは互いに視認できる距離である。

現在の6号墳の周辺は、北側が急な傾斜であるのに対し、南側は比較的緩やかな傾斜になっている。また墳丘の南側には幅2～3mほどの道が通されている。なお、この道の6号墳南東側の樹木搬出路の溝状部において、2006年に古代の火葬墓が発見されている（緒方編2011）。

6号墳墳頂最高点の標高は529.722mで、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなす。墳丘斜面には葺石の一部とみられる石材が露出している。後述するように、これら葺石石材は墳丘北側の急斜面下を流れる沢で採取できるものである。現状の墳丘では段築の様子は判然としない。

墳丘斜面は西側で標高526.3m、北側で標高524.9m、東側で標高523.9m、南側で標高524.8mの付近でほぼ水平に変化する。したがってそれらの地点を墳端と考えるならば、6号墳は現在の地形において東西31.7m、南北29.1m、高さ3.4～5.8mの円墳に復元できる。また墳丘の周囲は西側で標高526.0m、北側で標高524.2m、東側で標高523.4mの地点で傾斜が変化するため、北側と東側で幅3～4m程度の墳端平坦面が復元できる。西側と南側に関しては墳端平坦面の様子ははっきりとしない。なお、周溝の存在は確認できない。

墳頂平坦面は標高529.3～529.4m以上においてみられ、その広さはおよそ東西9.3m、南北7.0mである。墳頂平坦面の東側には盗掘の痕跡と思われる浅い陥没がある。

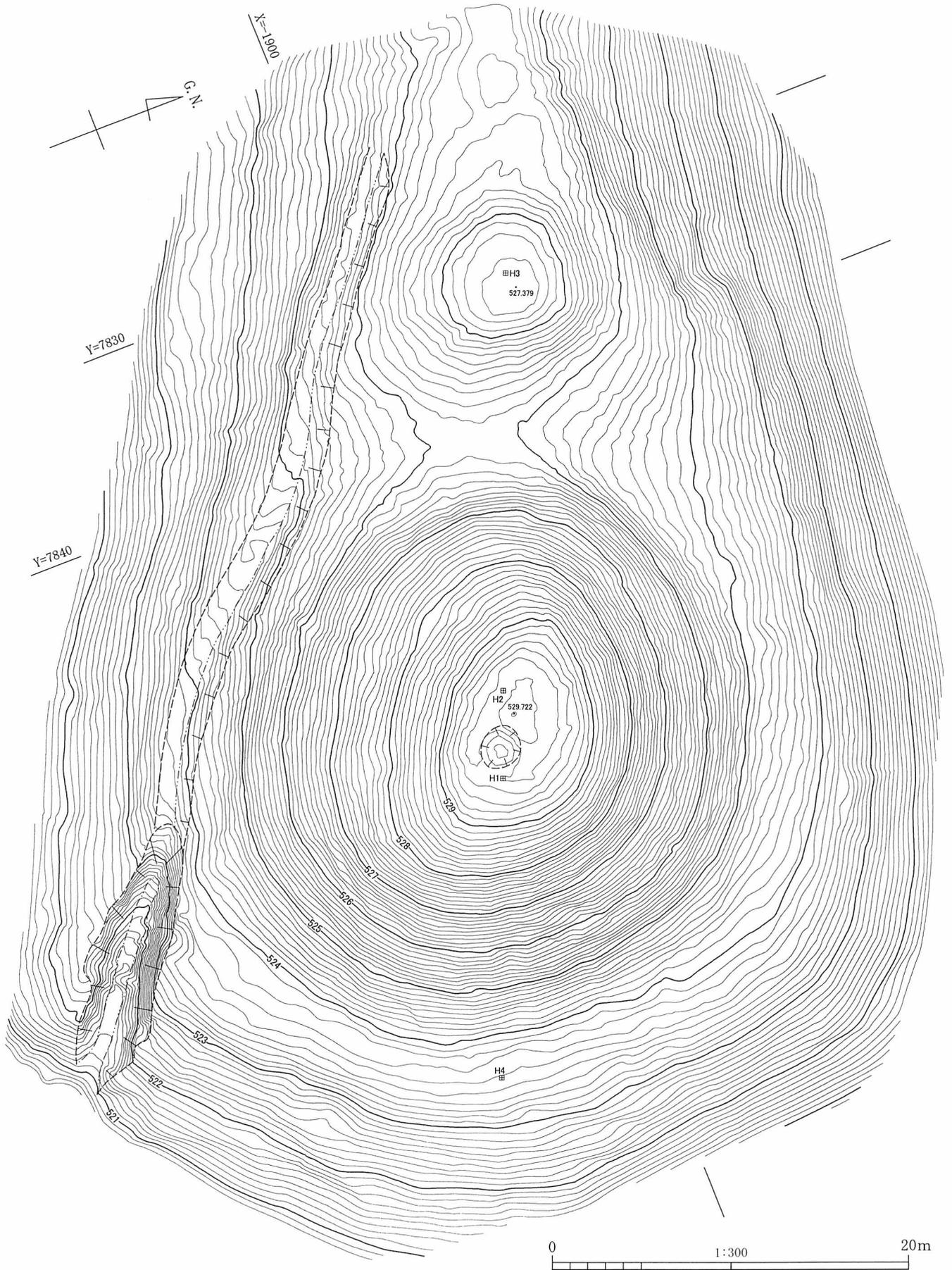
墳丘は目立って削平されておらず美しい円丘を保っており、保存状態は非常に良好である。ただし後述のように、今回の調査の結果、実際の規模は地表観察より得られた上記の数値より若干小さいものとなった。

6号墳の西側には隣接して7号墳が築かれている。7号墳最高点の標高は527.379mで、墳丘の傾斜は西側で標高526.7m、北側で標高526.3m、東側で標高526.3m、南側で標高526.4mの地点でほぼ水平に変化する。よってそれぞれを墳端と考えると、7号墳は東西11m、南北12m、高さ1mの円墳と推定される。また墳丘の周囲は、北側で標高525.7mの地点において傾斜が変化するため、幅1m程度の墳端平坦面が存在すると思われる。西側は尾根に沿って水平な面が続くため墳端平坦面の幅は確認できず、東側、南側の様子も判然としない。標高527.2m以上を墳頂平坦面とすれば、その直径は5mである。

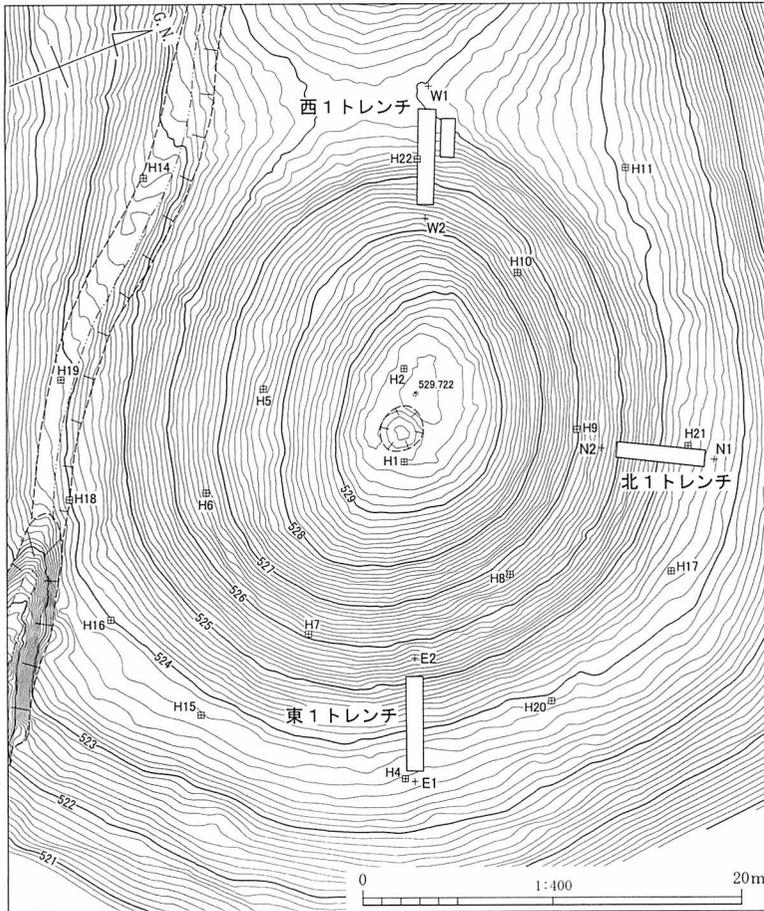
7号墳と6号墳との境ははっきりとしない。墳端の標高を6号墳西側で526.3m、7号墳東側で526.3mとすると、両者の間隔はおよそ6mである。 (河村)

2. トレンチの設定（第8図）

今回の調査では平原6号墳の墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘の東・北・西にそれぞれ1箇所ずつ、計3箇所のトレンチを設定した。いずれも墳端位置の確認を主眼としたトレンチである。順に東1・北1・西1トレンチと呼称する。各トレンチは樹木の間を縫うようにして設定したため、互いに直角あるいは平行の関係にはなっていない。



第7図 平原6・7号墳測量図（東側の円丘が6号墳）



第8図 トレンチ配置図

東1トレンチは測量基準点H1からH4のラインに沿って、幅1m、長さ5mの規模で設定した。北側の北1トレンチも幅1m、長さ5mの規模である。西1トレンチについては当初幅1m、長さ5mの規模で設定していたが、途中、墳端位置をより確実に確認するため、西へ0.5m拡張した。さらに北側に幅0.8m、長さ2mの拡張区を設定した。(黄)

3. 調査の所見

(1) 東1トレンチ (第9図)

墳丘東側の墳端位置の確認を目的に、測量基準点H1とH4を結ぶ直線に沿って設定したトレンチである。規模は幅1m、長さ5mで、トレンチ上端の位置は基準点E2から東に1mの地点である。

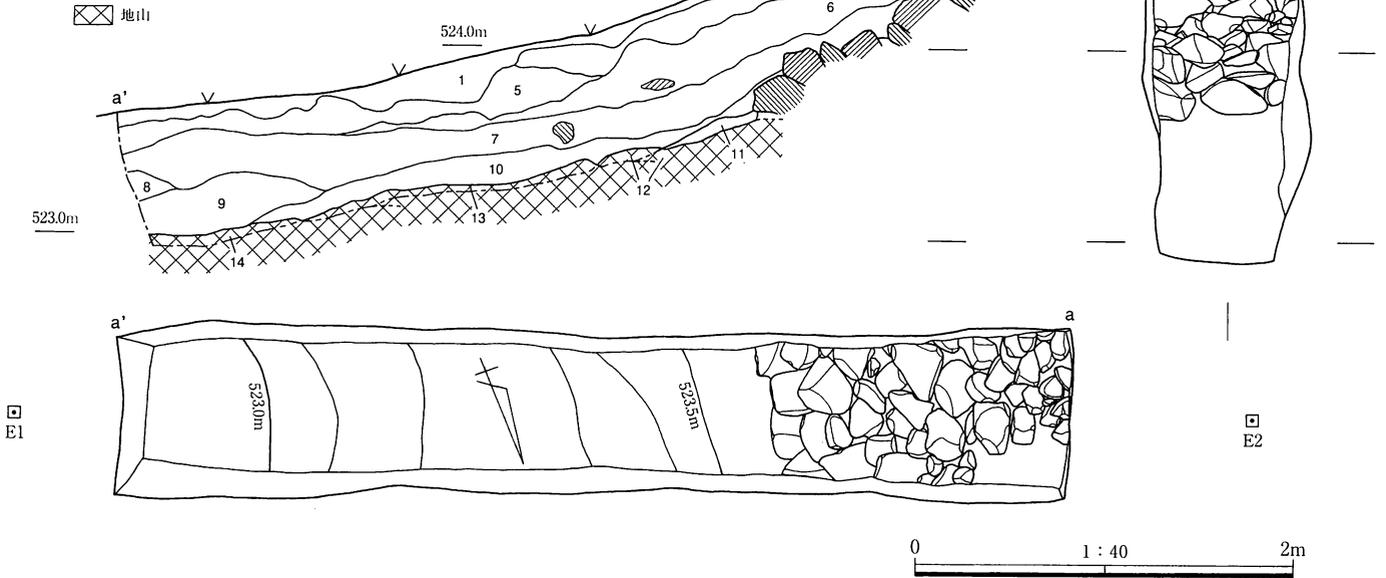
調査の結果、表土および流出土を0.4～0.5m掘り下げたところで、良好に残存する葺石を検出した。ただし、トレンチ北西隅の葺石は転落し、残存していない。基準点E2から東に2.5m、現地表下約0.6mの地点で基底石を確認し、そこを墳端とした。基底石の大きさは長さ約25cmで、墳丘斜面に使用される石材よりも大きい。なお、基底石下端面の標高は523.7mである。

葺石は、基底石の位置から上方に約27°の傾斜で、相互にかたく組み合うように葺かれている。また、基準点E2から東に1.5mの地点で葺石石材の大きさが変化している様子がうかがえる。1.5m地点より墳頂側には長さ20cm以内の小さな石材、墳端側には長さ20cm以上の大きな石材が使われている。墳端に近づくにつれて、葺石には大きな石材が使われているようである。これらの葺石はトレンチよりさらに上方へと続いており、後述する西1トレンチの様相から判断すると、今回確認したものは段築1段目の葺石であると考えられる。なお、葺石の石材には、角が取れて丸みを帯びた河原石が使われ、白色を呈するものが多い。石材の種類としては角閃石安山岩・輝石安山岩・溶結凝灰岩があげられるが、なかでも角閃石安山岩が最も多い。

基底石より東側は約12°の傾斜で下っており、基準点E1から西に2m、標高523.3mの地点でその傾斜が若干急になる。したがって、基底石から傾斜が変化したその地点までを墳端平坦面とみることができる。その幅は基準点E1より西に4mから2mの地点までの約2mである。墳端平坦面はアカホヤ層(第12層)・ローム層(第13層)で構成される。そのことから古墳築造においてはアカホヤ層に達するまでの整地が行われたことがわかる。なお、墳端平坦面には礫敷きは存在せず、また周溝となるような掘り込みも確認されなかった。

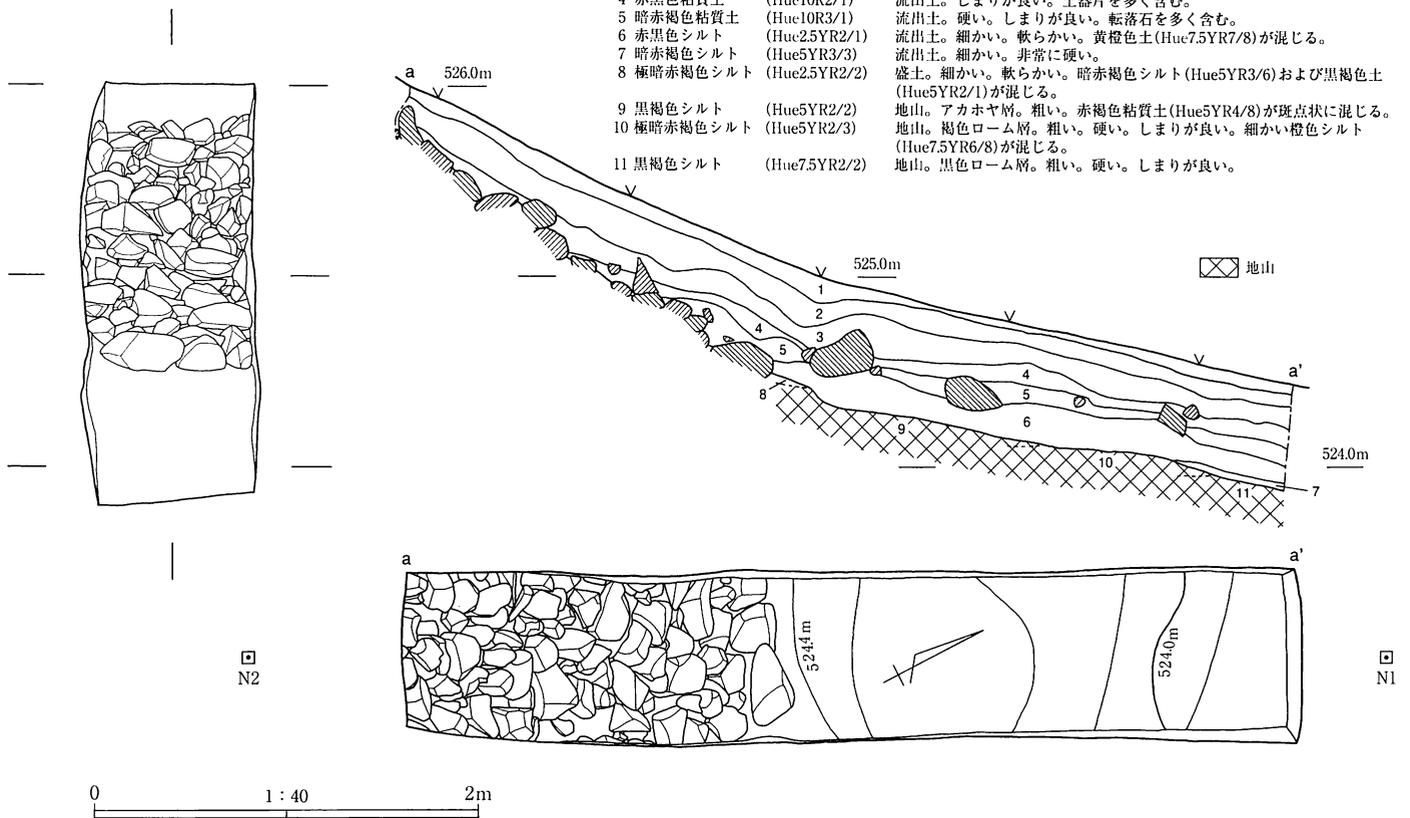
基底石直下の盛土(第11層)には、アカホヤ層上位の黒ボク土、アカホヤ、下位のローム土が混じる。

- 1 赤黒色シルト (Hue10R1.7/1) 流出土。粗い。草木の根が多く混じる。
- 2 赤黒色シルト (Hue2.5YR2/1) 流出土。粗い。もろい。
- 3 赤黒色シルト (Hue2.5YR2/1) 流出土。硬い。
- 4 赤黒色シルト (Hue2.5YR1.7/1) 流出土。もろい。
- 5 黒褐色シルト (Hue5YR1/2) 流出土。もろい。
- 6 赤黒色シルト (Hue2.5YR2/1) 流出土。しまりが良い。転落石を少し含む。
- 7 黒褐色シルト (Hue5YR2/1) 流出土。軟らかい。
- 8 赤黒色シルト (Hue2.5YR1.7/1) 流出土。硬い。転落石を多く含む。
- 9 黒褐色シルト (Hue5YR2/1) 流出土。しまりが良い。
- 10 黒色シルト (Hue5YR1.7/1) 流出土。しまりが良い。
- 11 黒褐色シルト (Hue5YR3/1) 盛土。暗褐色(Hue5YR2/3)が混じる。
- 12 黄褐色砂質土 (Hue10YR5/8) 地山。アカホヤ層。やや硬い。
- 13 黒褐色シルト (Hue5YR2/3) 地山。褐色ローム層。細かい。硬い。
- 14 赤黒色シルト (Hue10R1.7/1) 地山。黒色ローム層。細かい。硬い。



第9図 東1トレンチ平面図・断面図・立面図

- 1 赤灰色シルト (Hue2.5YR4/1) 表土。細かい。少し軟らかい。
- 2 赤黒色シルト (Hue2.5YR2/1) 流出土。細かい。もろい。
- 3 赤黒色シルト (Hue1.5R2/1) 流出土。粗い。しまりが良い。
- 4 赤黒色粘質土 (Hue10R2/1) 流出土。しまりが良い。土器片を多く含む。
- 5 暗赤褐色粘質土 (Hue10R3/1) 流出土。硬い。しまりが良い。転落石を多く含む。
- 6 赤黒色シルト (Hue2.5YR2/1) 流出土。細かい。軟らかい。黄褐色土(Hue7.5YR7/8)が混じる。
- 7 暗赤褐色シルト (Hue5YR3/3) 流出土。細かい。非常に硬い。
- 8 極暗赤褐色シルト (Hue2.5YR2/2) 盛土。細かい。軟らかい。暗赤褐色シルト(Hue5YR3/6)および黒褐色土(Hue5YR2/1)が混じる。
- 9 黒褐色シルト (Hue5YR2/2) 地山。アカホヤ層。粗い。赤褐色粘質土(Hue5YR4/8)が斑点状に混じる。
- 10 極暗赤褐色シルト (Hue5YR2/3) 地山。褐色ローム層。粗い。硬い。しまりが良い。細かい橙色シルト(Hue7.5YR6/8)が混じる。
- 11 黒褐色シルト (Hue7.5YR2/2) 地山。黒色ローム層。粗い。硬い。しまりが良い。



第10図 北1トレンチ平面図・断面図・立面図

三 墳丘の構造

墳端平坦面をなすローム層は2層見られ、褐色ロームが上層（第13層）に、黒色ロームが下層（第14層）になる。なお、流出土は10層に分層できたが、シルト質でしまっており転落石を含んでいた。壺形埴輪片や土師器片が出土したが、原位置を留めるものはなかった。（原）

（2）北1トレンチ（第10図）

墳端の確認を目的として、墳丘の北側に設定したトレンチである。トレンチの大きさは幅1m、長さ5mで、トレンチ上端は基準点N2より北に0.8mの位置にある。

調査の結果、表土および流出土を0.3～0.5m掘り下げたところで墳丘面に達した。基底石は、基準点N2より北に2.6m、現地地表下約0.5mの位置にあり、その下端面の標高は524.5mである。確認された基底石のうち、最大のもの長さは約40cmである。

基底石の南側、すなわち墳丘斜面には葺石が良好な状態で残存しており、ほぼ隙間なく一面を覆っていた。葺石石材はいずれも角が取れて丸みを帯びており、河原石を用いたものと思われる。形は様々で、四角・丸・扁平などがみられた。大きさはほぼ揃っており、長さ15～20cmであった。葺石に使われている石材はほとんどが角閃石安山岩であり、その中に輝石安山岩も少量みられる。溶結凝灰岩や流紋岩も稀に含まれていた。また、多くが白色を呈していた。今回の調査範囲内では、目地が通るような様子は確認できなかった。葺石はトレンチより上部へとまだ続いており、後述する西1トレンチの様相から、これは段築1段目の葺石だと思われる。葺石の傾斜は約32°である。

基底石より北側には、地山成形によって墳端平坦面を造り出している。基準点N1より南に1.15m、現地地表下0.55m、標高524.04mの地点で傾斜が変化しているため、そこまでが墳端平坦面の範囲だと思われる。その幅は1.85m、傾斜は約12°である。墳端平坦面はアカホヤ層（第9層）・ローム層（第10層）によって構成されており、このことからアカホヤ層に達するまでの整地が行われたことがうかがえる。墳端平坦面に小礫は敷かれていなかった。また、周溝となるような掘り込みも確認されなかった。

墳端平坦面の上には盛土（第8層）がみられ、基底石はこの上に乗っている。盛土は、アカホヤ、その上部の黒ボク土、下部のローム土が混じった土で形成されている。

表土および流出土を7層に分層したが、それらは主にシルト質であった。そのなかでも4層には壺形埴輪片が、5層には転落石が多く含まれていた。なお、出土した壺形埴輪片の中で原位置を留めているものはなかった。（森）

（3）西1トレンチ（第11図）

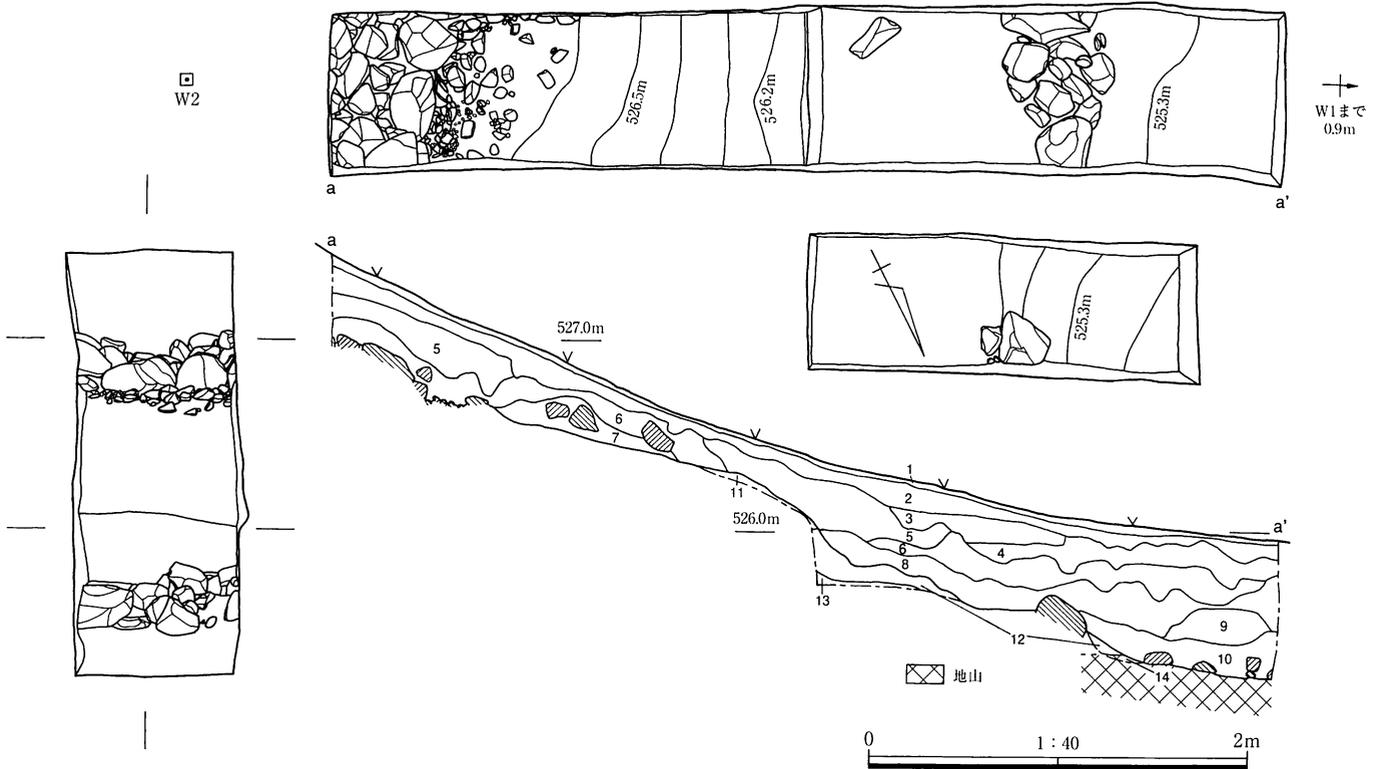
墳丘西側の墳端位置の確認を目的として設定したトレンチである。当初は幅1m、長さ5mのトレンチであったが、墳端の位置をより正しく確認するため、西側へ0.5m拡張した。さらにトレンチ北側に幅0.8m、長さ2mの拡張区を設定した。

西1トレンチでは段築1・2段目の葺石と墳端平坦面及び段築テラス面を検出した。

段築1段目葺石の残存状況は良好ではなく、基底石とその付近のみが残存している。基底石は基準点W1から東へ2.4m、現地地表下約0.4mに位置し、その下端面の標高は525.5mである。大きさは最大のもので長さ約30cmである。後述する段築テラス面の標高が526.6～526.7m、幅0.6～0.8m程度であるとする、段築1段目葺石の傾斜は25°前後、水平長は2.6～2.8m前後に復元できる。

基底石より西側には地山成形によって墳端平坦面が造られている。ここには褐色ローム層（第14層）のみがみられ、東1・北1トレンチで検出されたアカホヤ層は存在しない。したがって、この部分ではローム層に達するまでの整地が行われたと考えられる。なお、今回の調査範囲内では平坦面の全体

- | | | | |
|--------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|
| 1 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 表土。粗い。草木の根が多く混じる。 | 8 極暗赤褐色シルト (Huc2.5YR2/2) | 流出土。粘性が強い。しまりが良い。 |
| 2 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 流出土。粗い。粘性の強い部分が混じる。しまりが悪い。 | 9 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 流出土。粘性が強い。 |
| 3 褐色シルト (Huc2.5YR4/3) | 流出土。黄色の粘土塊が多く混じる。 | 10 極暗赤褐色シルト (Huc2.5YR2/2) | 流出土。粘性が強い。しまりが良い。転落石を多く含む。 |
| 4 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 流出土。粘性が強い。 | 11 明黄色土 (Huc10YR6/8) | 盛土。アカホヤ、ローム土が混じる。 |
| 5 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 流出土。粗い。粘性がやや強い。粘土塊が多く混じる。 | 12 赤黒色粘質土 (Huc2.5YR1.7/1) | 盛土。しまりが良い。ローム土混じる。 |
| 6 赤黒色シルト (Huc2.5YR1.7/1) | 流出土。粘性がやや強い。転落石を多く含む。 | 13 極暗赤褐色粘質土 (Huc2.5YR2/2) | 盛土。しまりが良い。ローム土混じる。 |
| 7 極暗赤褐色シルト (Huc2.5YR2/2) | 流出土。粘性が強い。しまりが良い。 | 14 褐色土 (Huc10YR4/6) | 地山。しまりが良い。ローム層。 |



第 11 図 西 1 トレンチ平面図・断面図・立面図 (断面図は表裏反転)

を把握するには至っていない。また、周溝となるような掘り込みも確認できなかった。

段築 2 段目葺石は 1 段目と比べて良好に遺存する。基準点 W 2 から西へ 1.2 ~ 1.4 m、現地地表下約 0.4 m の地点に基底石があり、その下端面の標高は 526.7 m、大きさは最大のもので長さ約 30 cm である。葺石の傾斜は約 30° である。この基底石から現状の墳頂平坦面となる標高 529.4 m 付近まで段築 2 段目葺石が続くと仮定すると、その水平長は 6 m 程度と推定される。

葺石石材は 1・2 段目ともに角閃石安山岩がほとんどであり、少量の輝石安山岩を含んでいる。

2 段目葺石基底石より西側には段築テラス面が存在する。その標高は 526.6 ~ 526.7 m で、そこには 5 ~ 15 cm 角の角閃石安山岩の小礫が敷かれている。削平が及んでおりテラス面の正確な幅は確認できないものの、原位置を留める小礫の様相から 0.6 ~ 0.8 m 程度の幅であると推測される。これと同じ高さで墳丘全体にテラス面がめぐるとすれば、段築 1 段目の長さは場所により異なることになる。

墳端平坦面をなす地山 (第 14 層) の上には盛土 (第 12 層) があり、段築 1 段目の基底石はこの上に乗っている。一部墳丘を断ち割った箇所などでは、第 12 層とは区別できる別の盛土 (第 11・第 13 層) を確認している。総じて盛土は、アカホヤとローム土が混じった土で形成されている。

遺物は壺形埴輪片と土師器片が出土したが、原位置を留めているものはなかった。 (岡田)

4. 墳丘形態の復元 (第 12 図)

平原 6 号墳は後世の削平をほとんど受けることなく、ほぼ築造時の形態を保っている古墳である。前述の通り、今回の調査では墳丘の東・北・西に計 3 箇所のトレンチを設定し、それぞれ東 1・北 1・

三 墳丘の構造

西1トレンチと呼称した。設定した全てのトレンチにおいて、墳端および葺石の状態を確認することができた。調査の結果を元に、墳丘形態の復元を行う。

墳形と規模 現状の墳丘測量図及び今回の調査成果から、墳形は円墳、その規模は東西31m、南北28mと推定される。直径の復元にあたっては、各トレンチの段築1段目基底石の位置を基準とする。墳丘北側は各トレンチで検出された基底石を元に墳端ラインが復元可能であった。しかし墳丘南側に関してはトレンチを設定していないため、現在の地表面における斜面傾斜変換点を墳端と仮定して直径を復元した。段築1段目基底石下端は東1トレンチで標高523.7m、北1トレンチで標高524.5mに位置する。西1トレンチでは、標高525.5mで確認することができた。墳丘南側斜面で傾斜が緩やかになるラインの現地表面の標高は525m前後である。したがってそれらを結んだラインを墳端とし、東西31m、南北28mの楕円形の円墳を復元した。東1トレンチと西1トレンチの基底石の位置を比較すると、東1トレンチの方が1.8mほど標高が低く、墳端は水平にまわらない。

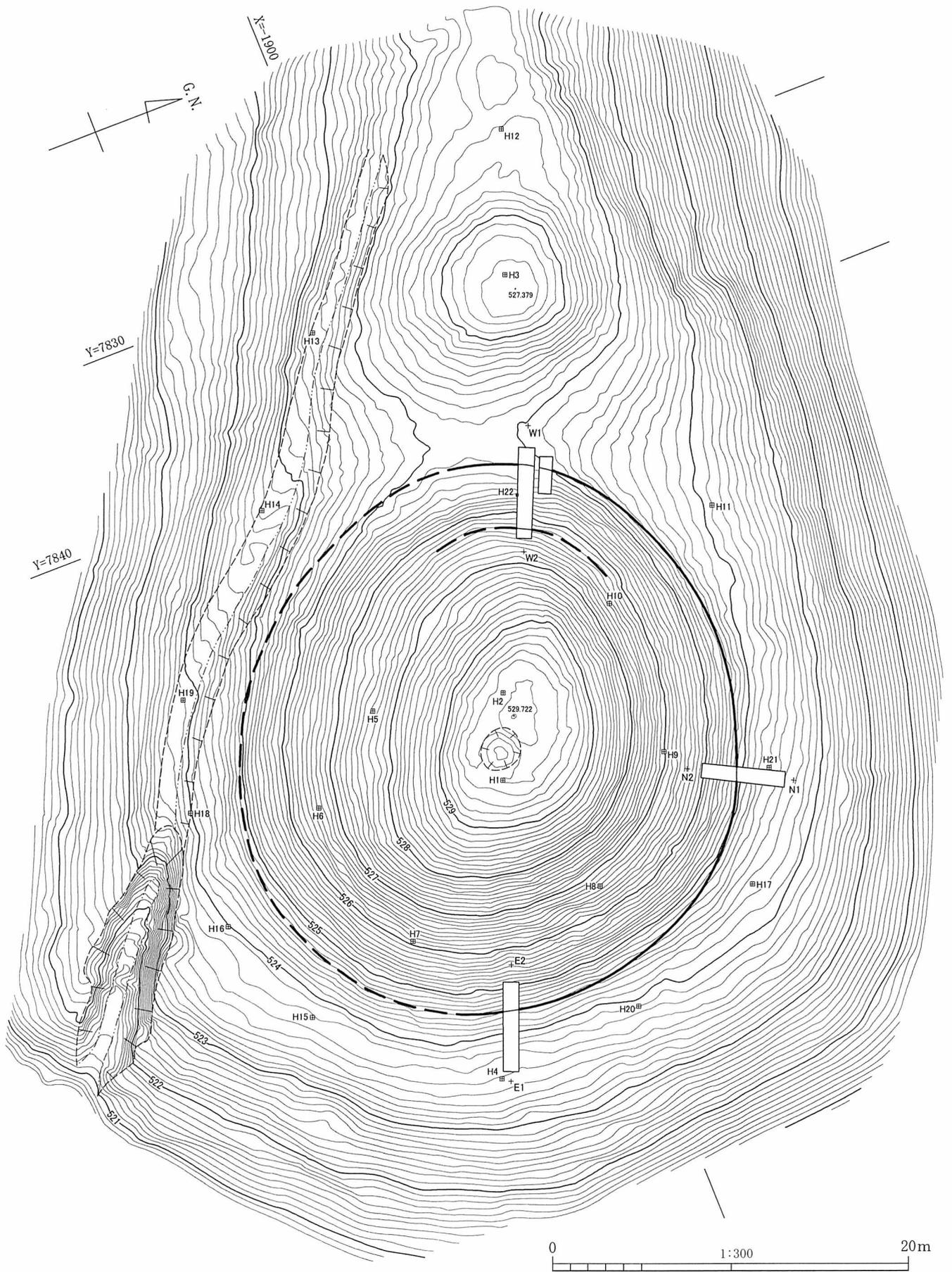
平原6号墳は丘陵の尾根筋上に立地しており、墳形が地形に制約されている。これは墳端が水平でないことや、墳形が正円形をなさないと思われることから推測することができる。また西側の墳丘斜面が緩やかな勾配をなすのに対して、南・東・北側は地形に沿ってやや急勾配を呈する。

東1・北1トレンチの墳端では平坦面の全体が検出された。東1トレンチでは標高523.3m、北1トレンチでは標高524.04mの地点に傾斜変換点が存在する。したがって墳端基底石の外側には、1.85～2m幅の平坦面を有することが確認された。小礫は敷かれておらず、周溝は存在しない。西1トレンチに関しては、今回の調査範囲内では墳端平坦面の全体を把握するには至らなかった。

段築 西1トレンチで段築2段目の葺石とテラス面の存在が確認された。段築2段目基底石下端の標高は526.7mである。テラス面は現在の残存状況から0.6～0.8m幅であると推測でき、また5～15cm角の小礫を敷いている。今回の調査で段築が確認されたのは西1トレンチのみであるが、墳丘全体でテラス面が同じ標高に造られると仮定すると、526.6～526.7mの高さでテラス面が墳丘をまわると推測される。なお、今回は墳頂平坦面を確認するための調査は行っていない。しかし現状の地形では標高529.3～529.4m地点で墳頂がほぼ平坦になっている。墳丘の規模から判断すると2段築成の古墳である可能性が高い。原位置を保つ壺形埴輪や土師器は検出されなかった。

葺石 葺石の石材はほぼ角閃石安山岩であり、少量の輝石安山岩を含む。稀に、流紋岩や溶結凝灰岩も認められる。付近を踏査したところ、これらは墳丘北側の谷部に存在する沢で比較的容易に手に入る石材であることがわかった。したがって、特別に遠隔地から運び込まれたものではないと考えられる。また葺石として使用されている石材の多くが白色であるため、意図的に白色石材を選択し利用した可能性が考えられる。葺石は墳丘上に隙間なく敷き詰められているが、狭い調査範囲のため目地が通るような様子は確認できなかった。葺石の大きさは全体的に15～20cm角であり、基底石には20～40cm角の比較的大きな石材を並べている。また段築テラス面には、小礫を用いている。

墳丘構築 墳丘全体の構築方法は不明であるが、墳端の成形方法は地山を整地して盛土を行う地山成形である。東1・北1トレンチでは地山をアカホヤ層まで削り出して古墳の土台を成形した後、削り出した黒ボク土・アカホヤ・ローム土を混合し盛土として用いていることが確認された。西1トレンチに関しては、アカホヤ層下位のローム層に達するまで地山を整地することによって成形している。全トレンチにおいて、基底石直下には薄い盛土が存在する。今回の調査では、西1トレンチのみ墳丘面の確認のため断ち割り調査を行った。しかし墳丘構築を確認することを目的とした断ち割りではなかったため、墳丘内部の盛土層の詳細な観察は今後の課題である。(安田)



第 12 図 平原 6 号墳丘形態復元図

四 出土遺物

1. 壺形埴輪（第13図、第5表）

今回の調査では壺形埴輪片が346点（東1トレンチ25点、北1トレンチ219点、西1トレンチ102点）出土した。全て破片で全形をうかがえるものはなかったが、口縁部において8個体、底部において6個体を確認した。どのトレンチにおいても原位置を留めているものはなかった。以下、図示した遺物について記述する。

（1）口縁部（1～7）

当古墳出土の壺形埴輪は口縁部によって、単口縁形態と二重口縁形態に分類できる。

単口縁（1～4） 1～4は単口縁形態の壺形埴輪である。

1は今回出土した中で、最も残りの良かった個体である。口縁部が外湾気味に大きく開き、頸部の稜が不明瞭で、肩はあまり張らない。残存部から検討すると、胴部は長胴であると思われる。口縁部外面にタテハケが施され、内面にはヨコハケ・ナナメハケの後、口縁端部に丁寧なヨコナデが行われる。胴部外面にもタテハケが施され、その頸部には丁寧なヨコナデが行われる。内面には横方向で時計回りのケズリが施され、その頸部にはユビオサエが集中する。赤色顔料の塗布はみられない。黒斑を胴部下方に確認できた。復元した口径は20.4cm、胴部最大径は20.6cmである。また、今回出土した別個体の底部と照らし合わせてみると、器高は28.0cm前後と推測される。

2もやや外湾気味に口縁部が開くが、1の口縁部ほど開きは小さくなく、頸部の稜が不明瞭である。口縁部外面には幅の広いタテハケの後に幅の狭いタテハケが、内面にはヨコハケ・ナナメハケが施され、その後に口縁端部に丁寧なヨコナデが行われる。胴部外面はタテハケの後にヨコハケが一周回っており、極めて特徴的である。頸部外面には、口縁部・胴部の各調整の後、ヨコナデが行われる。内面にはユビオサエ・ユビナデが施される。赤色顔料の塗布や黒斑は確認できなかった。口径は16.5cmである。

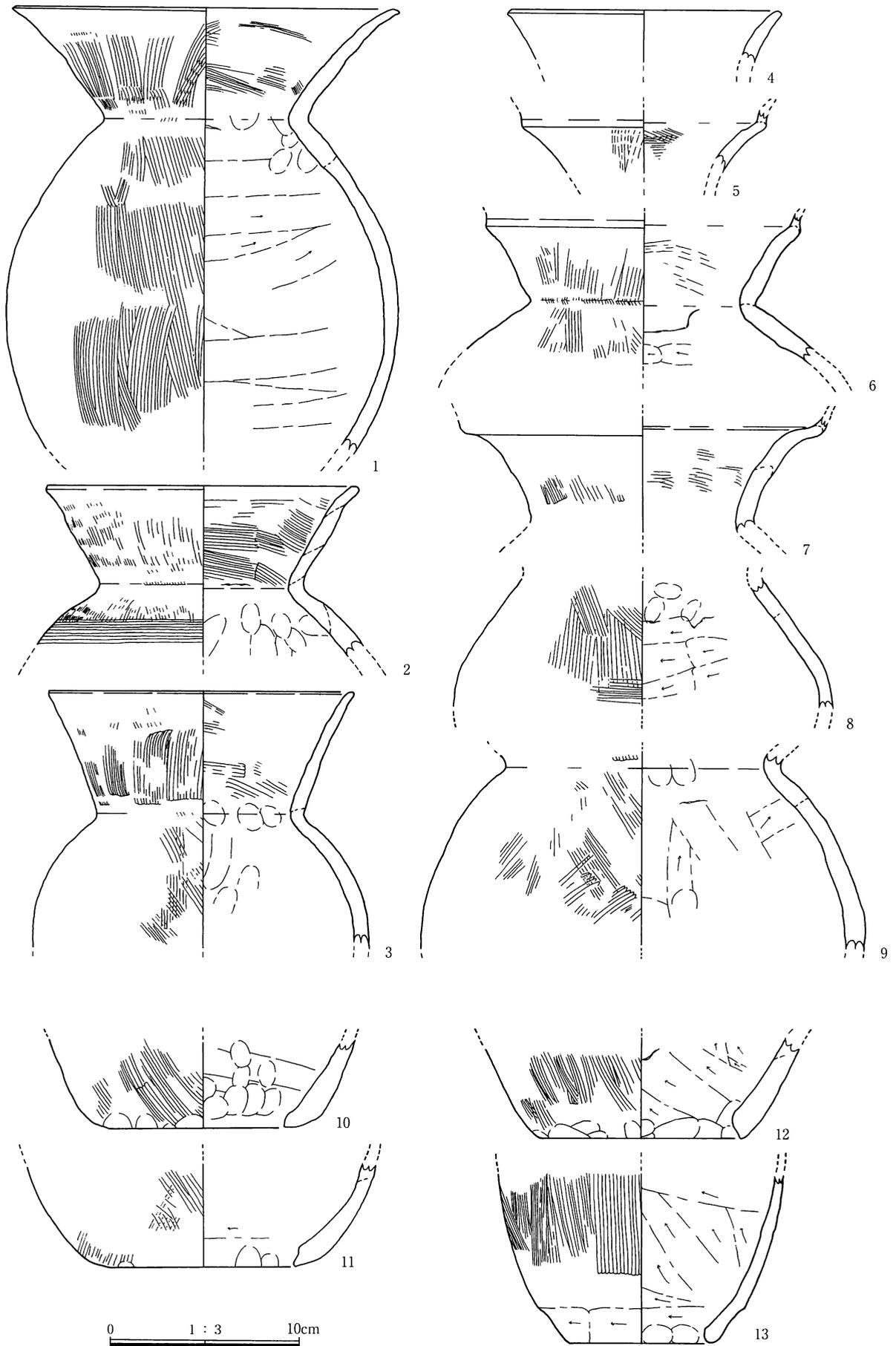
3もやや外湾気味に口縁部が開き、頸部の稜は不明瞭で、1よりは肩が張る。口縁部外面は幅の広いタテハケの後に幅の狭いタテハケが施され、内面はヨコハケ・ナナメハケの後、口縁端部にヨコナデが行われる。胴部外面はタテハケの後にナナメハケが、内面はユビナデのみが、頸部の外面はヨコナデが行われ、内面にはユビオサエが集中する。赤色顔料・黒斑は確認できなかった。口径は16.1cm、復元した胴部最大径は17.4cmである。

4の口縁部もやや外湾気味に開いていると思われるが、残存率が低いため復元口径を含め、あいまいな点を残す。内外面調整共にヨコナデのみ確認できた。赤色顔料・黒斑は確認できず、復元した口径は14.6cmである。

二重口縁（5～7） 5～7は二重口縁形態の壺形埴輪である。

5はその上方の残存部が薄いことから、第二口縁部はあまり長く続かないと思われる。第二口縁部と第一口縁部の接合部は比較的明瞭に段をなしている。口縁部外面は有段部と第一口縁部にタテハケが行われた後に、有段部に沿って丁寧なヨコナデが施される。内面は第一口縁部のヨコハケ・ナナメハケの後、第一口縁部と第二口縁部の境に丁寧なヨコナデが行われる。赤色顔料・黒斑は確認できなかった。復元した有段部径は12.9cmである。

6も第二口縁端部は残っていないが、器壁の厚さから判断すると、5と同様にあまり長くは続かな



第 13 図 平原 6 号墳出土壺形埴輪実測図

いと思われる。第二口縁部と第一口縁部の接合部が比較的明瞭に段をなしている。直立した頸部は存在せず、外湾する第一口縁部にそのまま第二口縁部を載せたような形を呈する。第一口縁部の下部がやや膨らむ。胴部は最大径を示す部分までは残っていないが、胴部上方が開くことから、肩は張っていると思われる。外面調整はタテハケ・ヨコナデである。第一口縁部・胴部はタテハケの後に、有段部と頸部にヨコナデが施される。また、この個体は外面調整を観察することで製作手順がわかる。頸部において、第一口縁部下端の胎土が胴部に施されたハケメの上に覆いかぶさっている様子が確認できる。さらに頸部には、第一口縁部・胴部のタテハケの後にヨコナデが施されているが、第一口縁部側のハケメよりも胴部側のハケメの方がよく残っている。これらのことから、胴部まで一度成形・調整を行い乾燥させた後に、口縁部を成形・調整し、頸部にヨコナデが施されたと考えられる。第一口縁部内面の調整はヨコハケ・ナナメハケの後にナデが施される。胴部内面上方は横方向で反時計回りのケズリが施され、その頸部にはヨコナデのみが行われる。赤色顔料・黒斑は確認できない。復元した有段部径は 16.6 cm、頸部径は 12.0 cm である。

7 は有段部と第一口縁部のみの残存である。5・6 と同様第二口縁部と第一口縁部の接合部が比較的明瞭に段をなし、外湾気味の第一口縁部をもつ。有段部・第一口縁部の外面はナナメハケの後にヨコナデが、内面はヨコハケの後にヨコナデが施される。また、有段部の内面において丁寧なヨコナデが行われる。赤色顔料・黒斑は確認できない。復元した有段部径は 19.4 cm である。

(2) 胴部 (8・9)

図化できる胴部が 2 点あったが、どちらもその個体に接合する口縁部がなかったため、単口縁・二重口縁のどちらに対応する胴部であるかはわからなかった。

8 は最大径を示す部分まで残存している胴部で、肩があまり張らない点で 1 に似ている。外面はナナメハケ・タテハケの後に一部にヨコハケが、頸部に丁寧なヨコナデが行われる。内面は横方向で反時計回りのケズリが行われ、頸部にユビオサエが施される。赤色顔料はみられなかった。黒斑が肩部に確認できた。復元した頸部径は 12.6 cm、胴部最大径は 20.0 cm である。

9 は頸部下端から胴部の最大径を示す部分まで残存しており、8 よりも肩が張る。外面調整は口縁部にタテハケが施され、胴部には左上がりのナナメハケの後に肩の部分に右上がりのナナメハケが施される。頸部には丁寧なヨコナデが行われている。内面調整は、胴部に縦方向で下から上へのケズリが、頸部にはユビオサエが施される。赤色顔料・黒斑は確認できなかった。復元した頸部径は 14.6 cm、胴部最大径は 23.8 cm である。

(3) 底部 (10～13)

図化できる底部が 4 点あったが、胴部の 2 点と同様、いずれもその個体に続く口縁部から胴部までが確認できなかったため、単口縁・二重口縁のどちらに対応するものかはわからなかった。底部の端部をつまんで整形するものと、けずって整形するものに分けられる。

ツマミ整形の底部 (10～12) 10～12 が、底部の端部をつまんで整形したものである。

10 は底部下端がやや厚くなっており、粘土紐を積み上げて成形したものと思われる。外面には左上がりのナナメハケが、内面には横方向のケズリが施される。内外面共に各調整の最後にユビオサエが施されている。内外面のそれぞれのユビオサエの位置が一对になっている点から、つまんでいると考えることができ、この壺形埴輪は胴部を成形・調整した後に倒立させ、底部をつまんで整形していると推測される。赤色顔料・黒斑は確認できなかった。復元した底径は 9.4 cm である。

11 も底部下端がやや厚くなっており、10 と同様、粘土紐を積み上げて成形したものと思われる。

第 5 表 平原 6 号墳出土壺形埴輪一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点
			口径	底径	器高					
1	壺形埴輪	口縁部～胴部	(20.4)	—	(28.0)	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	良好 有黒斑	胴部は長胴と思われる。復元した胴部最大径は20.6cm。単口縁。	北1 トレンチ
2	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.5	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄橙 内：にぶい黄橙	良好 残存部に 黒斑なし	肩部に明瞭なヨコハケが一周入る。単口縁。	西1 トレンチ
3	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.1	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄橙 内：黄橙	良好 残存部に 黒斑なし	復元した胴部最大径は17.4cm。単口縁。	北1 トレンチ
4	壺形埴輪	口縁部	(14.6)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良好 残存部に 黒斑なし	単口縁。	西1 トレンチ
5	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ	外：黄橙 内：淡黄	良好 残存部に 黒斑なし	復元した有段部径は12.9cm。二重口縁。	東1 トレンチ
6	壺形埴輪	有段部～胴部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ・ケズリ	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	良好 残存部に 黒斑なし	胴部を成形・調整し乾燥させた後、口縁部を成形。復元した有段部径は16.6cm、頸部径は12.0cm。二重口縁。	西1 トレンチ
7	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：ヨコナデ・ナナメハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ	外：橙 内：にぶい橙	良好 残存部に 黒斑なし	復元した有段部径は19.4cm。二重口縁。	東1 トレンチ
8	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：ヨコナデ・ナナメハケ・タテハケ・ヨコハケ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：浅黄橙	良好 有黒斑	明瞭なヨコハケを肩部にもつ。復元した頸部径は12.6cm、胴部最大径は20.0cm。	東1 トレンチ
9	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ・ナナメハケ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：浅黄橙	良好 残存部に 黒斑なし	復元した頸部径は14.6cm、胴部最大径は23.8cm。	北1 トレンチ
10	壺形埴輪	底部	—	(9.4)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：明黄橙 内：黄橙	良好 有黒斑	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ
11	壺形埴輪	底部	—	(9.7)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい橙 内：浅黄橙	良好 有黒斑	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ
12	壺形埴輪	底部	—	(10.8)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：浅黄橙 内：浅黄橙	良好 有黒斑	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ
13	壺形埴輪	底部	—	(7.4)	—	外：タテハケ・ケズリ・ユビナデ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良好 有黒斑	最終段階において底部をけずって整形。	北1 トレンチ

※ () は復元径。

外面には右上がりのナナメハケの後に左上がりのナナメハケが施される。内面には縦方向と横方向のケズリが施される。内外面共に各調整の後、底部下端をつまんで整形する。赤色顔料はみられなかった。下端部に黒斑が確認できた。復元した底径は 9.7 cm である。

12 も底部下端がやや厚くなり、これも粘土紐を積み上げて成形したものと思われる。外面にはナナメハケが、内面には左上がりのケズリが施される。内外面共に各調整の後、底部下端をつまんで整形する。赤色顔料はみられない。黒斑が残存部全体に確認できた。復元した底径は 10.8 cm である。

ケズリ整形の底部 (13) 13 は 10 ～ 12 とは異なり、けずって整形される底部である。外面は全体的にタテハケが、内面は左上がりのケズリが行われる。外面の下端部は、横方向で反時計回りのケズリによる整形の後に、ケズリに沿うようにユビナデが横方向に施されており、これらの工程により、底部は胴部よりもやや薄く仕上げられている。赤色顔料はみられない。黒斑が確認できた。復元した底径は 7.4 cm である。

(4) 特徴と時期

特徴 以上が今回図示する事のできた壺形埴輪の概要である。

図示できなかつた他の細片も含めて、平原 6 号墳出土壺形埴輪の特徴をまとめると、以下の 9 項目に整理できる。

- A. 二重口縁壺形埴輪と単口縁壺形埴輪がほぼ同数存在する。
- B. 二重口縁の第二口縁部は短いと推定され、第一口縁部と第二口縁部の接合部は比較的明瞭に段をなす。直立した頸部が存在せず、外湾する第一口縁部の上にそのまま第二口縁部を載せたような形を呈する。

四 出土遺物

- C. 単口縁は外湾気味に開く。
- D. 胴部形態は長胴と推測される。
- E. 肩部の外面調整に明瞭なヨコハケをもつものがある。
- F. 底部は粘土紐の積み上げによって成形され、当初より底面を有さない。
- G. 底部の器壁を薄く仕上げようという意図により、製作の最終段階においてツマミ整形あるいはケズリ整形による底部調整が行われる。
- H. 赤色顔料が塗布された個体がある。
- I. 黒斑をもつ個体がある。

上記特徴のうち、Hの赤色顔料が塗布された個体については、図示できなかった胴部破片1点のことである。この破片は、外面のハケメの凹部にわずかに赤色顔料が残存している部分が2箇所確認でき、これはベンガラではないかと思われる。他にもやや赤みがかかった色調を呈する個体が数点あり、当古墳の壺形埴輪は薄く赤色顔料が塗られていた可能性がある。

B・E・Gは当古墳の壺形埴輪特有のものであり、他にあまり類例をみない。

時期 以上の特徴のうち、D・F・G・Iは壺形埴輪の時期を決める上で有用なものである。

Dの胴部形態が長胴である点は、壺形埴輪の時期を決める上で重要な特徴である。壺形埴輪は胴部形態が球形胴から長胴に変化する。前方後円墳集成編年（以下、集成編年）（広瀬 1991）3期と4期の境が球形胴から長胴への過渡期であるとする見解は、各研究者間でほぼ一致している（高橋 1992、田中 1995、竹中 2004）。このことから、胴部形態が長胴だと思われる当古墳の壺形埴輪は集成編年4期以降のものである可能性が高い。

Fの底部が粘土紐の積み上げによって成形され、当初より底面を有さないという特徴は、円筒埴輪とかかわるものである。壺形埴輪の底部は、底面をいったん成形したのち、焼成前に削り貫いて穿孔するものから、当初から底面を作らないものへと移り変わる。後者は円筒埴輪の成形法と同じであり、この技法は円筒埴輪製作技法の影響を受けて壺形埴輪にも取り入れられたものだと考えられる（竹中 2004）。また、底部孔を焼成後に穿孔するものから成形するものへの変化も、胴部形態と同じで3期と4期の境で起こるとされる（高橋 1992、田中 1995、竹中 2004）。このことから、当古墳の壺形埴輪は集成編年4期以降のものであることがわかる。

Gの底部にツマミ整形あるいはケズリ整形が行われるという特徴は、当古墳出土の壺形埴輪に特有のものである。今回出土した底部の整形法にはこの2種類があるが、どちらとも厚くなった底部の器壁を薄くすることを目的に行われた工程だと考えられる。壺形埴輪は、胴部が長胴化し、器高が高くなり大型化するため、底部はそれを支えることができるように肥厚したものに変わっていく（竹中 2004）。つまり、一般に底部は薄いものから厚いものへ変化するが、平原6号墳の壺形埴輪はそれに逆らうかのような底部調整を取り入れている。これは、積み上げ成形という新しい技法を導入しつつも、底部厚を前段階のように薄く仕上げようとする意図がはたらいっているものと推定できる。このことから、当古墳の壺形埴輪は底部を肥厚させているものよりも一段階古く位置づけられるとみることも可能である。肥厚した底部は、竹中克繁の九州壺形埴輪編年4期に位置付けられ、これは集成編年5期に対応する。当古墳出土の壺形埴輪を底部が肥厚するものよりも一段階古い時期のものとする、集成編年4期以前のものと考えられる。

最後に、Iの黒斑をもつ個体があるという特徴より、当古墳の壺形埴輪は野焼きによるものだと判断される。よって、当古墳の壺形埴輪は集成編年5期以前のものであると推測される。

以上を総合して判断すれば、平原6号墳出土の壺形埴輪は集成編年4期に位置づけられる。(入江)

2. 土師器 (第14図、第6表)

今回の調査で土師器片が45点(東1トレンチ32点、北1トレンチ0点、西1トレンチ13点)出土した。全て破片で全形をうかがえるものはなかったが、高坏2個体と甕1個体を確認した。また全て流出土層で出土しており、原位置を留めているものはなかった。なお全て細片の為、今回は器形を確認できたものだけを図示した。

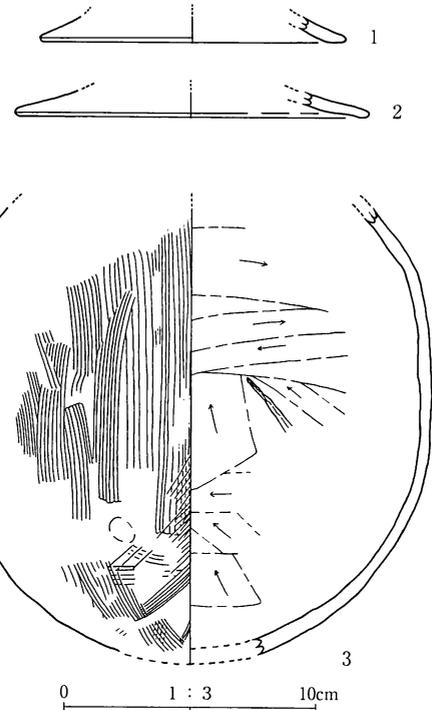
高坏(1・2) 1・2は高坏の脚裾端部片である。いずれも内外面にナデが施される。復元した脚裾端部径はそれぞれ1が12.0cm、2が14.0cmである。また脚裾端部の傾きからとも脚部は柱状になり、脚柱部と脚裾部の境界が明瞭なタイプ(高坏A)になると推定される。

甕(3) 3は甕の胴部片である。胴部はやや長胴気味の球形をなし、底部は丸底と推定される。外面にはタテハケ後にナデが施される。内面には、胴部の下半部に上方向のケズリ、胴部の上半部に横方向のケズリが施され、ところどころにケズリの工具痕が残る。

時期 甕はハケメの単位幅が広いことから、林田和人編年2期に位置づけられる(林田2002、檀佳克氏のご教示による)。また今回、確認できた高坏2点はいずれも高坏Aであり、脚部がハの字状に広がるタイプ(高坏B)は確認されなかった。したがって甕の編年観も考慮すると、当古墳の土師器は林田編年1期から2期、集成編年6期前後に位置づけられる(林田2002)。しかし資料数が少なく確定的ではないため、今後のさらなる検討が重要である。(與嶺)

3. 出土遺物の時期

前述したように壺形埴輪は集成編年4期、土師器は集成編年6期前後に位置づけられ、編年上の位置づけに大きな差異がある。古墳築造に伴うという点では壺形埴輪の編年観を優先すべきだが、土師器との時期差はかなり大きい。追葬が行われていた可能性を考慮すれば、今回出土の土師器は幾度目かの追葬に伴うものと解釈することもできるが、壺形埴輪の時期に対応する土師器が見られない点は疑問である。したがって今後の調査では出土する土師器の時期に細心の注意を払う必要がある。また、将来的には埋葬施設の時期との対比も重要であり、壺形埴輪編年と土師器編年の対応関係を見直す必要もあるのかもしれない。これらは今後の大きな検討課題である。(與嶺)



第14図 平原6号墳出土土師器実測図

第6表 平原6号墳出土土師器一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点
			口径	底径	器高					
1	高坏	脚裾端部	—	(12.0)	—	外:ナデ 内:ナデ	外:橙 内:橙	良好	高坏A	西1 トレンチ
2	高坏	脚裾端部	—	(14.0)	—	外:ナデ 内:ナデ	外:橙 内:にぶい橙	良好	高坏A	東1 トレンチ
3	甕	胴部	—	—	—	外:ハケメ・ユビオサエ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	外:明赤褐 内:灰褐	良好	ハケメ単位幅広い	東1 トレンチ

※ () は復元径。

五 まとめ

周辺の環境 平原古墳群は熊本県阿蘇市山田字平原に所在する。阿蘇地方は九州の中央、熊本県北東部から大分県西部・宮崎県北西部にかけての阿蘇山を中心とする地域のことを指し、阿蘇谷と南郷谷という2つの平地部を有している。平原古墳群は阿蘇谷北縁の外輪山山麓、北外輪山から南へ突出する遠見ヶ鼻（大観峰）と象ヶ鼻の中央に位置する。古墳群周辺は標高500～530mであり、現在は植林され鬱蒼としている。阿蘇地域は旧石器時代から縄文時代にかけて外輪山を中心に人々の生活の痕跡が残され、弥生時代には阿蘇谷カルデラ内西側にその居住域を移動させる。続く古墳時代の集落もカルデラ内に存在すると思われるが、調査が行われていないため、その位置は不明確である。阿蘇谷東側には古墳時代中期から後期にかけて、前方後円墳を有する中通古墳群をはじめ、迎平古墳群、横穴式石室を主体部とする上御倉・下御倉古墳など多くの古墳が築かれている。

平原古墳群・6号墳の現状 平原古墳群は1981年の県道213号線（内牧坂梨線）改修工事の際に発見され、1号墳は発掘調査が行われた。その後、古墳群内のその他の古墳についても分布・測量調査が行われた。しかし研究史の中で古墳の名称や古墳数に混乱が生じており、平原古墳群についての共通認識が保たれていないことが判明した。平原古墳群は1号墳を除くほとんどの墳丘が、現在まで大きな改変を受けていない。6号墳も例外ではなく、美しい円形を保っている。現在の墳丘には葺石石材が散在してみられ、墳端や墳頂平坦面の様子も現地表面からおおよそ推定することができる。

6号墳の墳丘形態 今回の調査では6号墳墳丘の東・北・西側に1箇所ずつ、全て墳端にかかるように計3箇所のトレンチを設定した。それぞれ東1・北1・西1トレンチと呼称する。全体的に葺石の残存状態は良好であったが、西1トレンチ検出の段築1段目に関しては悪く、基底石付近のみ原位置が保たれていた。それぞれのトレンチの調査成果から墳丘形態を復元すると、平原6号墳は2段の段築を有する東西31m、南北28mの円墳であることが推定された。墳丘は丘陵の尾根筋に立地していることから地形の制約を受けており、墳端の標高は東側が低く、次に北側、西側と高くなっていき水平にはまわらない。墳端には平坦面を有する。墳端平坦面は幅1.85～2mで、小礫は敷いておらず周溝は存在しない。また段築テラス面も存在する。段築テラス面は0.6～0.8m幅で5～15cm角の小礫が敷かれている。墳頂平坦面は未確認だが、現在の地表面では標高529.3～529.4m以上に平坦な面が存在する。また今回の遺物出土状況からは、壺形埴輪の樹立位置は判断できない。墳丘にはおおよそ15～20cm角の葺石が葺かれ、基底石には20～40cmほどの比較的大きな石材を使用している。墳端の成形方法は地山成形であり、アカホヤ層及びローム層を整地して土台を造った後、削り出した土を混合して盛土としていることが一部で確認された。

出土遺物 流出土中からは壺形埴輪と土師器が出土し、円筒埴輪や須恵器は検出されなかった。また、原位置を保つものはなかった。全て小片であったが、接合によっておおよその形を復元できる個体が複数個認められた。壺形埴輪は単口縁と二重口縁のものが出土し、ほぼ同数の割合で存在した。胴部は長胴であり、底部は当初より底面を有さない。加えて底部にはケズリあるいはツマミ整形によって器壁を薄くするという2種類の技法が使われている。また黒斑を有する。胴部が球形胴から長胴になることや、底部孔を穿孔して作るものから底面を当初よりもたないものに変化するの、集成編年3期と4期の境である（高橋1992、田中1995、竹中2004）。底部を薄くする整形は集成編年4期以前の特徴である可能性があり、また黒斑は集成編年5期以前にみられる。したがって平原6号墳の

壺形埴輪は集成編年 4 期に位置づけられる。他の特徴として、二重口縁の第二口縁部が極端に短いことや外面の肩部にヨコハケを持つことが挙げられる。これらの特徴および底部のツマミ・ケズリ整形は他の古墳では類例がなく、当古墳特有のものとして注意すべきである。

土師器は高坏脚裾端部と甕胴部の存在を確認した。土師器の出土破片数は極めて少数である。高坏は脚柱部と脚裾部のあいだに明瞭な屈曲部を有するタイプ（高坏 A）である。また甕の胴部には単位の広いハケメをもつことから林田編年 2 期に位置づけられる（林田 2002）。高坏と甕の編年を考慮すると土師器の年代は林田編年 1 期から 2 期に位置づけられ、集成編年 6 期前後に対応する。

以上の結果から、当古墳出土の壺形埴輪と土師器の編年的位置づけには相違がみられ、これら遺物の編年の対応関係も含め今後の検討が必要である。

熊本県地域の首長墓系譜変動と阿蘇地域 熊本県地域の古墳時代首長墓系譜変動の画期を追う。当地域の古墳時代前期前葉から中葉には有力な首長墓が宇土半島基部の東西丘陵部に現れ、丘陵に挟まれた平地部を望む場所に前方後円墳が築造される。前期後葉にはそれらの系譜が衰退し、次は有明海と八代海という 2 つの海を意識した場所に有力な古墳の立地が移る。中期前葉から中期中葉初頭には当地域全体で前方後円墳の築造が停滞し、熊本平野周辺部に有力な円墳が築造される。これらの状況を整理すると、前代の海沿い沿岸ルートに加えて河川づたいの内陸ルート及び熊本平野東端の内陸ルートが整備されたと考えられる。そして後期には八代海側に有力な首長墓が出現する（杉井 2010）。

熊本県地域の古墳時代を以上のように捉えると、中期中葉から中期後葉の河川づたい内陸ルートの整備と、後期前半の八代海側への首長墓系譜移動という、大きく分けて 2 回の画期が訪れる。このうち前者の流れに組まれるのが、白川上流域の阿蘇谷に存在する中通古墳群である。中通古墳群は消滅・推定合わせて 14 基からなり、当該時期最大の前方後円墳である長目塚古墳を有している。

平原古墳群 今回調査した平原 6 号墳の成果と熊本県地域の古墳動向から、阿蘇地域での平原古墳群について考察していきたい。平原古墳群は中通古墳群に近接しており、丘陵部と平野部という立地の違いはあるものの、目視できる範囲に築造されている。今回の調査で出土した遺物から平原 6 号墳の築造時期を検討すると、長目塚古墳より若干遡る古墳時代前期後葉から中期前葉であり、このことから両古墳群の築造時期に大きな差はないと推測することが可能である。また、阿蘇地方の古墳立地は弥生時代の集落立地と全く異なるという点で、弥生時代の有力者の系譜を引かないと考えられる。したがって、有力首長の出現背景として福岡側や大分側からのルートが考えられる。具体的には筑後川沿いに日田盆地を経由するルートや、大野川沿いに竹田盆地を経由するルートなどである。以上のような交通ルートの要所、結節点としての役割を果たす阿蘇地域は熊本県地域の古墳文化を探る上で重要な位置を占めているといえる。またその地域で大きな規模を持ち、重要な場所に位置する古墳である平原古墳群の概要を把握することは、阿蘇地方の古墳時代を考える上で重要である。

今後の課題 今回の調査では、目的としていた平原 6 号墳の墳丘規模・構造の把握を一定程度達成することができた。来年度以降は少なくとも墳丘の南側にトレンチを設定し、その墳端位置を確認する必要がある。その他にも段築 2 段目およびテラス面や墳頂平坦面の構造、壺形埴輪樹立状況など確認すべき点は多い。将来的には埋葬施設の調査も望まれる。また平原古墳群全体に関しても、問題が山積である。まず今回新たに発見した古墳も含め、周辺の古墳分布を正確に把握した上で、古墳番号を整理することが急務である。その上で、今回熊本大学が測量を行った 6・7 号墳以外の墳丘測量調査を行う必要があるだろう。多くの課題が残されているため、次年度以降も継続して調査を行い、平原古墳群の内容把握に努めたい。

（安田）

引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1999『阿蘇社と大宮司 中世の阿蘇』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書2 一の宮町
阿蘇町教育委員会 1989『小倉林道石棺発掘資料』
- 阿蘇町町史編さん委員会 2004『阿蘇町史』第1巻 通史編 阿蘇町
- 岩崎充宏・山下志保編 1994「中通古墳群」『熊本大学考古学研究室研究報告』第1集 熊本大学考古学研究室：
pp. 1-47
- 岩本政教他 1995『土地分類基本調査 阿蘇山・竹田』熊本県企画開発部土地対策課
- 緒方 徹編 2000『阿蘇町遺跡地図－阿蘇町遺跡詳細分布調査－』阿蘇町教育委員会
- 緒方 徹編 2011「附論 平原B遺跡－平原B遺跡内発見の火葬墓緊急調査－」『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査報告第2集 阿蘇市教育委員会：pp. 173-193
- 緒方 徹・宮本利邦編 2011『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査報告第2集 阿蘇市教育委員会
- 小畑弘己 2007「阿蘇旧石器文化の特質」『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告第2集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 281-293
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会：pp. 1-70
- 木崎康弘編 1993『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第131集 熊本県教育委員会
- 清田純一編 1982『陣内遺跡』阿蘇町文化財調査報告第2集 熊本県阿蘇町教育委員会
- 隈 昭志 1999『長目塚と阿蘇国造』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書1 一の宮町
熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのす』第19号 新日本教育図書：pp. 85-96
- 下村 智・吉田和彦・玉川剛司 2003「古墳におけるデジタル測量の研究－大分県下の古墳を事例として－」『九州考古学』第78号 九州考古学会：pp. 80-98
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
- 高橋 徹 1992「九州」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣出版：pp. 81-89
- 竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷とその意義－」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 13-32
- 田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）－埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の編年－」『おおいた考古』第7集 大分県考古学会：pp. 41-77
- 西住欣一郎 2010「凝灰岩製品から見た火砕流文化」『先史学・考古学論究』V下巻 甲元眞之先生退任記念 龍田考古会：pp. 1039-1053
- 野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 38-49
- 白水村史編纂委員会 2007『白水村史』白水村
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中期・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後円墳研究会：pp. 117-144
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社：pp. 24-26
- 文化財研究会 1983「阿蘇町小倉古墳群第一次測量調査概要報告」『熊本短期大学連合学会会報 研究論集』第38号 熊本短期大学連合学会：pp. 81-91
- 文化財研究会 1984「実験考古学の私的見解と小倉古墳群第二次測量調査概要報告」『熊本短期大学連合学会会報 研究論集』第39号 熊本短期大学連合学会：pp. 63-75
- 文化庁文化財保護部 1981『全国遺跡地図』43 熊本県 財団法人国土地理協会
- 松本幡郎 1983「阿蘇の成り立ち」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 84-90
- 宮崎敬士編 2010『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告第257集 熊本県教育委員会
- 宮本利邦編 2012『下の原遺跡』阿蘇市文化財調査報告第3集 阿蘇市教育委員会
- 渡辺一徳 2001『阿蘇火山の生い立ち』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書7 一の宮町

挿図出典

- 第2図 岩本他 1995
- 第4図 ①：清田編 1982、②：熊本県教委 1998、③：緒方編 2000
- 第5図 文化財研究会 1984
- 第6図 緒方編 2011